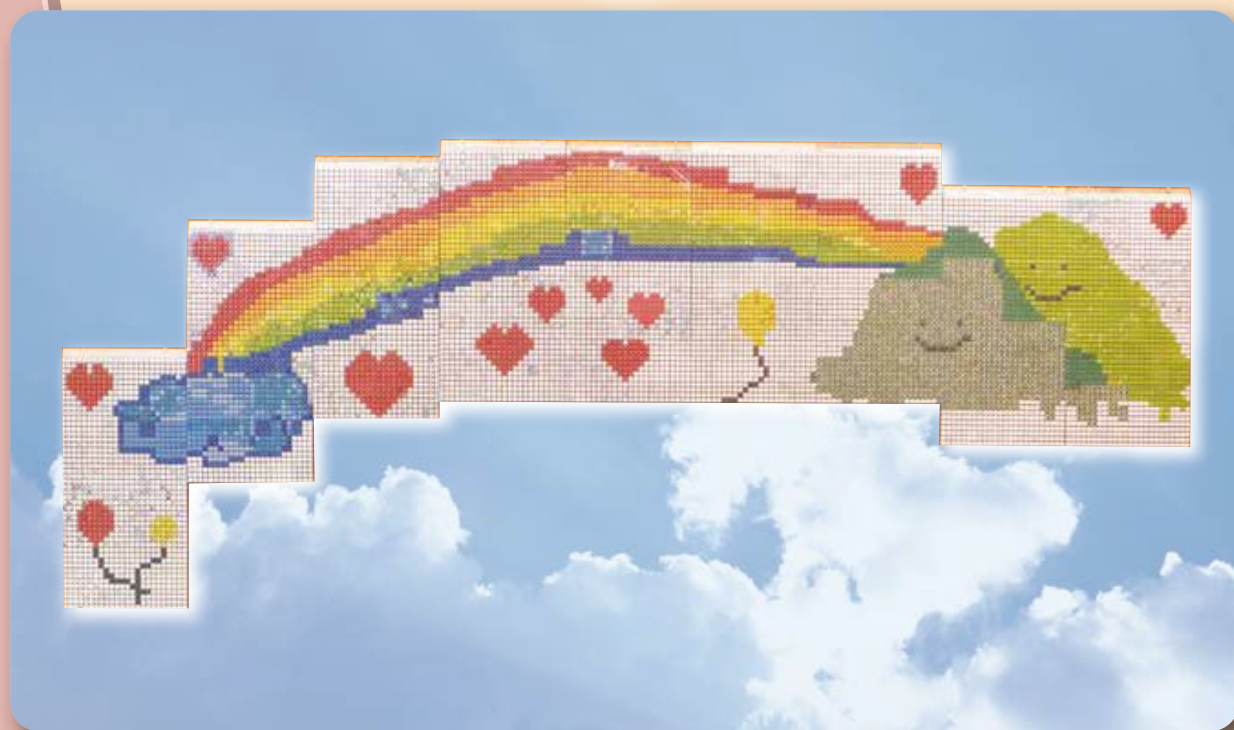


ともに生きる

地域で取り組む福祉学習 実践事例集



社会福祉法人 鳥取県社会福祉協議会
ボランティア・市民活動センター

もくじ

○はじめに

○福祉教育・福祉学習の新たなステージへ

○実践事例

伯耆町社協	学んで！体験して！思いやりの心を育てよう！ ～つながる福祉学習～	……4
境港総合技術高等学校 (境港市)	福祉の学習を通して地域の子どもたちと交流しよう	……6
鳥取市社協	高齢者の体を疑似体験しよう	……8
湯梨浜町社協	高齢者や障がいのある人が安心して暮らせるサポートを考えよう	……10
大山町社協	高齢者の気持ちになって	……12
八頭町立隼小学校	「あいサポートキッズ」になろう	……14
八頭町立八東小学校	「ふるさと八東を見つめて」 ～誰もが住みやすい町・八東町へ～（総合的な学習の時間）	……16
♥コラム	画面越しのコミュニケーションが孤立を招く？	……19
三朝町社協	福祉体験を通して“地域のいろいろな人とかかわろう”	……20
大山町社協	自然の大切さ・自然の恵みを知ろう	……22
末恒地区子育て支援委員会 (鳥取市)	わくわく交流ひろば	……24
倉吉市成徳公民館	元気なときに考えておこう 必ず役立つ！やさしい法教育講座	……26
鳴り石の浜プロジェクト (琴浦町)	障がいのある子どもとの交流～特別支援学校編～	……28
劇団ふきのとう (湯梨浜町)	誰もが生まれた地域・自宅で暮らしたいと思える地域づくりを考えよう	……30
湯梨浜町社協	誰もが住み慣れた地域で安心して暮らせる自治会を目指そう！	……32
智頭町社協	高校生と地域の方との交流 ～自分たちの学んだ活動を見てもらおう～	……34
琴浦町社協	地域みんなが集まろう！	……36
南部町社協	ペットボトルキャップをワクチンにかえて世界の子どもたちを救おう！	……38

各事例の最後に「ここがいいね！」として、事例のポイントや発展につながる視点を記載しています。

○資料編

- ・市町村社会福祉協議会の連絡先一覧と活用可能な学習メニュー
- ・福祉教育ホームページ一覧（紹介）
- ・ボランティア関係資料のご紹介

はじめに

福祉教育・福祉学習は、現在の社会情勢を踏まえて、新たな視点での展開が求められています。国は、国民全体での子ども・若者の支援、年齢・障がいに関わりなく誰もが安心・安全に暮らせる社会をめざし、「共生社会」の実現をあらゆるところで求めています。その意味からも、「福祉」は特定の誰かに向けられたものだけではなく、地域社会を構成するあらゆる人々の安心・安全、そして幸福と自己実現の達成をめざし、互いに支え合っていく形で、その理念が生かされる必要があります。このことから、誰もがあたたかく包まれた「社会的包摂」(ソーシャル・インクルージョン)の社会の実現が求められています。福祉教育・福祉学習は、そのような「社会的包摂」の実現に向けた重要な取り組みとして評価されています。

私たちが暮らす鳥取県では、長年の福祉教育・福祉学習の取り組みを通じて、「福祉の心」を育むことを大切にしてきました。まさに、「社会的包摂」を実現する上では、地域で暮らす一人ひとりの「福祉の心」を育み、そして磨き上げることが必要です。そのための援助が、福祉教育・福祉学習の実践に他なりません。

鳥取県社会福祉協議会ボランティア・市民活動センターでは、「ともに生きる」シリーズとして、これまで福祉教育・福祉学習のテキスト等を発行してきました。この実践事例集は、「地域で取り組む福祉教育のすすめ・ともに生きる『福祉で輝く地域づくり』」(2010年3月発行)、「福祉で輝く地域づくり・福祉学習のススメ ハンドブック」(2012年3月発行)、「地域で取り組む福祉学習実践ヒント集」(2013年3月)に続く、地域版福祉学習テキストの4冊目になります。

この冊子で紹介している実践は、県内の市町村社協が指定を受けた「地域で取り組む福祉教育・ボランティア活動推進事業」(2008年度～)や、実際に学校や地域で取り組んだ福祉教育・福祉学習の実践です。それぞれの事例を参考に、地域や公民館、学校、企業・団体等さまざまな場所で、アレンジや創意工夫を施し、今後の福祉教育・福祉学習への参考にしていただけることを期待しています。

鳥取県社会福祉協議会

福祉教育研究委員会

委員長 國本 真吾(鳥取短期大学幼児教育保育学科准教授)

■ 福祉教育・福祉学習の新たなステージへ

鳥取短期大学幼児教育保育学科 准教授 國本 真吾

この実践事例集には、17の実践事例が収まっています。鳥取県内で取り組まれた実践について、各実施主体から提出された原稿を福祉教育研究委員会で議論し、委員会としてのコメントがそれぞれに付けられています。このページでは、それらをご覧くださいにあたり、これからの福祉教育・福祉学習の実践において踏まえていただきたい視点をいくつか紹介します。

◆ 豊かな福祉観で実践をつくろう！

「はじめに」でも触れましたが、「共生社会」の実現にあたり「ソーシャル・インクルージョン（社会的包摂）」の実現が求められています。これまでの福祉教育・福祉学習では、制度としての福祉の対象者としての高齢者・障がい者を中心に、さまざまな実践が試みられてきました。いわゆる「社会的弱者」の問題を通じての学習ですが、近年の福祉課題は実に多様になってきています。例えば、虐待、暴力、貧困等を背景として、支援を必要とする人々の問題が増加しています。また、それらの人々に支援が届かないことにより、地域や集団における孤立化、いわゆる「社会的孤立」の問題も目立ちます。ソーシャル・インクルージョンは、そのような社会的に排除されている人々や孤立している人々も積極的に包み込み、誰もが安心・安全で暮らすことが出来る社会の構築をめざしている理念であるとも言えるでしょう。その意味からも、福祉は決して限定された対象に向けられたものではなく、国民全体の幸福追求の実現に生かされていくことが求められています。

福祉教育・福祉学習においては、従来の高齢者・障がい者に加え、上記のような現代社会で支援を必要としているさまざまな人々の問題を取り上げることが重要です。例えば「貧困」問題に注目した場合、経済的な貧困としての生活困窮者が浮かぶかもしれませんが、しかし、「貧困」問題は経済的な問題に留まらず、精神的な貧困、制度上の貧困等あらゆるものにつながる・広がる視点にもなっています。実践を計画する者の福祉観を豊かにすることで、福祉教育・福祉学習の実践も大きく変わるでしょう。

◆ 困難さを「人と環境の相互作用」でとらえる視点

障がい者との関わりや交流を通じて、障がい理解の機会になっている実践も多く試みられてきました。しかし、「障がい」と一口に言っても、身体障がい・知的障がい・精神障がい・発達障がい等、障がいの種類によっても抱える困難さや当事者の声も異なることがあります。学校教育の現場では、比較的「見える障がい」として身体障がいを例にすることが多かったと言えるでしょうが、子どもの発達段階を考慮すれば当然です。しかし、社会の中では「見えにくい障がい」としての知的障がい・精神障がい・発達障がい等への理解が十分ではないという声も存在します。発達段階や学習経験を考慮し、「見えにくい障がい」への理解を深められるような題材の検討が必要になります。

また、障がいや高齢者の困難さを理解するために、疑似体験を取り入れる実践も多いでしょう。疑似体験の実施は重要ですが、その後の振り返りを感想の出し合いで終わらせないことが必要です。疑似体験では、「大変さが分かった」「○○をするのが難しかった」等、障がいや老化による困難さ

を確認することができますが、その際、マイナスのイメージを確認することが多くなっていないでしょうか。例えば、身体にマヒがあって一人では着替えや移動も難しい人の場合、「できない」ことがその人のすべてになってはいけなはずです。介助ボランティアやヘルパーを利用し、自分では出来ない部分を補い、その人が好きな活動で充実した生活を送っていたとしたら、疑似体験ではプラスの側面が理解されない形になります。「障がい」の考え方として、現在ではICF（国際生活機能分類）に基づき、困難を「人と環境の相互作用」として理解することが求められています。「障がいがあるから〇〇できない」のではなく、「障がいはあるけど〇〇できる」、「□□の支えがあれば〇〇できる」等、「障がい＝マイナス」だけを強調しないことが重要です。

その意味から考えると、街に多くのバリア（障壁）が残っていても、周囲の支え合いの心が育まれていたら、単純に物理的なバリアを取り除くことがすべてではないとも言えます。完全なるバリア・フリー環境を生み出したり、最初からユニバーサル・デザインを基調とした環境を構築しても、心のバリアの在り方が問われてきます。日本国も批准した「障害者権利条約」では、「アクセシビリティ」の確保がうたわれています。スロープを設置して車いすでも移動しやすい環境を作っても、そのスロープをふさぐ形で違法駐車したり、ロープを張っていつでも使用できない形にするということでは、何のためのバリア・フリー環境かという問題になります。人や環境のあり方が困難さを増幅させることがないよう、私たちは何をすべきか。その問いとともに、問題解決へのアクションにつなげるための疑似体験であることが求められるでしょう。

◆ 実践の内容を深めよう

本事例集では鳥取市社協の事例として、高等学校での実践事例が紹介されています。学校での福祉教育は、「総合的な学習の時間」に取り組まれることが多いのですが、この実践は教科目の「保健体育」で行われたそうです。福祉教育の教科目での取り組みは重要で、他の教科目でも試みていく必要があるでしょう。決して、特定の時間に行う活動の福祉教育ではなく、教育課程全体や課程外の活動も含めての福祉教育の実践を構築していくかが課題です。また、この学校は鳥取県出身で「知的障害児福祉の父」と称せられた、滋賀県近江学園の創設者である糸賀一雄（1914～1968年）の母校でもあります。郷土や学校の先輩を顕彰する形で、それに関する学びを組み込むことが出来たら、きっと特色ある取り組みになったことでしょう。地域においても同様で、福祉に関わる鳥取県や私たちの住む地域にゆかりのある人物や事象等と結びつけ、福祉をより身近なものとして伝えていきたいものです。

その意味では、大山町社協の事例にある秀峰大山を知る活動は、福祉教育・福祉学習としては意外に思われるかもしれません。確かに、大山がない地域から見ればそうですが、この地域にとっては大山も一つの資源です。自然豊かな大山がその地域に何をもちたらし、またそこに住む人々の生活とどのようにつながるか、地域や自然を知る学びを通じて住民の幸福を考える契機にもなります。福祉教育・福祉学習にはそのようなアイデアが必要であり、実践を計画する人の柔軟な発想も重要でしょう。

以上のように、この実践事例集にある事例を、そのまま活用・適用させる福祉教育・福祉学習ではなく、豊かな福祉観や柔軟な発想、そしてアイデアを生かして、これからの実践を展開していただけることを期待します。この実践事例集に触発される形で、新たな実践事例が生み出されていくよう、福祉教育・福祉学習を新たな段階へと発展させていきましょう。

伯耆町社会福祉協会



学んで！体験して！思いやりの心を育てよう！ ～つながる福祉学習～

高齢者疑似体験や認知症サポーター養成講座を受け、高齢者の身体の不自由さや認知症の理解を深めることにより、思いやりの心を育て、自分たちにできることについて考える。

参加対象

- ・小学生
- ・デイサービス利用者

実施主体

- ・小学5年生
- ・社協

協働実践者

- ・地域包括支援センター
- ・「障がい老人をささえる家族の会」

◆プログラム

1. 目的

総合的な学習の時間を利用し、高齢者の身体の不自由さと認知症の病気の理解を深め、実際に高齢者と接するなかで思いやりの心と自分にできることについて考える。

2. 内容

時間	内容
45分	(1) 福祉センターについて知ろう 福祉センターの施設見学を行い、デイサービスの利用者の方と交流をしてみる。
45分	(2) 高齢者の体について学ぼう 高齢者疑似体験や車いす体験を通して、高齢者の体の不自由さや、かかわり方について学習する。
45分	(3) 認知症について学ぼう 認知症サポーター養成講座を受け、認知症の正しい理解と接し方について学習する。
45分	(4) 高齢者と交流しよう 今まで学習したことをふりかえりながら、実際に高齢者と接してみる。 「障がい老人をささえる家族の会」の方から、認知症高齢者の介護についてのお話を伺う。

3. 活用した地域資源等

- 「障がい老人をささえる家族の会」の方から、認知症高齢者の介護についてのお話を伺う。

4. 工夫した点

- ただ学ぶ、体験するといった学習ではなく、学んだことや体験したことによって、学ぶ前と学んだ後で高齢者との接し方が、どのように変化したかを実感してもらえるようにプログラムを考えた。



5. ふりかえり（成果や課題等）

（成果）

- はじめは高齢者とどのように接してよいか分からずにとまどっていた子どもたちが様々な学びと体験で実際の交流の際に優しい声かけや心配りをみせる場面が見られた。
- この学習のあと、社協のボランティア体験事業（盲導犬について学ぶ）に参加してくれた児童がいた。（以前はこの小学校からの参加者はなかった。）
- 町内で初めて小学生を対象とした認知症サポーター養成講座を開催することができた。町内の子どもたちへの認知症の理解をすすめる第一歩となった。
- 社協だけで福祉学習を行うのではなく、「障がい老人を支える家族の会」の方、地域包括支援センターの職員等の協力を得ることができた。

（課題）

- 今回は高齢者に対する福祉学習について取り組んだが、そこで終了するのではなく次の学年に進級した際に地域住民や障がいのある方との交流等、さらに「つながる学習」になるように考える必要を感じた。



6. 参加者の声

- 高齢者の人は動くのが大変そうだった。
- 認知症という病気のことが分かってよかった。
- 困っているお年寄りがいたら助けてあげたい。
- 家のおばあちゃんに優しくしてあげたいと思った。
- 知らない人でも困っている人がいたら、声をかけようと思った。



7. 担当者としての感想

今まで小学校の福祉学習は車いす・高齢者疑似体験のみ行うというのが主流だったので、小学校の教員と相談して、「つながる福祉学習をしよう！」ということになりました。

先生と子どもたちに何を伝えたいのか、どのような気づきをもってほしいのか何度も打ち合わせをしながら取り組むことにより、その都度明確な目標の共通理解をしたことが良かったと思います。



●小学生にもわかる「認知症サポーター講座」の開催

認知症理解の必要性が高まっているなかで、大人だけでなく、小学生（5年生）を対象とした認知症サポーター養成講座の開催は、高齢者を理解する点でも今後必要になってくる視点です。プログラム実施には、学校・社協・地域包括支援センター等関係者による綿密な事前の打ち合わせが必要ですが、プログラムの「ねらい」を明らかにし、担当者と教職員の熱意で協力を得ることができたのでしょう。プログラムに関わるすべての人で共通理解をしておくことが必要です。

●成長過程に応じたアレンジも可能

今回のプログラムは小学5年生を対象にしたものでしたが、「つながる福祉学習」を目指すという点では、中学校との連携も期待できます。地域住民を巻き込んだ「認知症高齢者徘徊模擬訓練」を実施する等して、地域全体で取り組むこともできるでしょう。小さな町だからこそできるプログラムへの期待も膨らみます。

鳥取県立境港総合技術高等学校福祉科



福祉の学習を通して地域の子どもたちと交流しよう

小学生の「高齢者疑似体験」を通して、児童が「高齢者福祉」に関して学習し、福祉科について理解を深めてもらう。福祉科生徒は「高齢者疑似体験」を安全で効果的に進めるための支援方を修得する。

参加対象

- ・高等学校
福祉科ボランティアコース3年生
- ・小学3年生

実施主体

- ・高等学校

協働実践者

- ・市社協
- ・県社協
(高齢者疑似体験セット貸出)

◆プログラム

1. 目的

小学生：高齢者疑似体験を通して高齢者の生活について考える。

高校生：小学生の体験活動を安全・効果的に支援する。またその中で、生徒自身の施設実習経験や高齢者との交流経験を活かし、小学生が高齢者の生活に関する課題やニーズ等気づくよう促す。

2. 内容

時間	内容
120分	<p>○本時は交流2回目「高齢者疑似体験」</p> <p>(1) 体験活動についての諸注意・打ち合わせ</p> <p>(2) 小学生来校・交流開始 講師（社協職員）から本時の諸注意</p> <p>(3) 高校生3名・小学生3名のグループで「つくし君」12セットを使用して、6つの体験プログラムを実施</p> <p>①封書を開け、指示書を読む ②歩く ③階段昇降</p> <p>④色の見え方（4色の猫の絵） ⑤小袋を開ける</p> <p>⑥ペットボトルのふたを開け、コップに注いで飲む</p> <p>(4) 班ごとに気づきのシートをまとめる</p> <p>(5) まとめのお会 気づきの発表 終わりの会</p>

【年間プログラム】地域の小学生との交流

1. オリエンテーション・学校探検
2. 高齢者疑似体験
3. 車いす体験・花植え
4. 若鳥丸乗船交流
5. 障がいの理解・手話を学ぼう
6. 調理交流

3. 活用した地域資源等

- 市社協と連携し、社会人講師として高齢者疑似体験活動プログラムを実施する。
- 県社協から小学生向け高齢者疑似体験セット「つくし君」を借用する。

4. 工夫した点

- 小学校から「交流を通して、福祉・高齢者に関する学習を深めたい」との要望があったことから、今年度よりこのようなプログラムを導入した。高校生も小学生の「高齢者疑似体験」を通して、高齢者とのかかわり方について、体験的に学びを深めることができた。

5. ふりかえり（成果や課題等）

（成果）

- 小学生の活動をより安全、効果的に支援するためのプログラムや会場設営等の工夫を高校生なりに考え、準備した。また、この体験学習を高齢者や障がい者理解への手がかりとし、車いす介助、視覚障がい者理解等の学習につなげることができた。
- 2回目の交流活動ということもあり、高校生が小学生の特性や個性に合ったかかわり方や声かけを工夫したこと、また、小グループで全員が安全に実施できる班編成・時間配分にしたので、どの小学生も落ち着いて、じっくりと体験することができた。

（課題）

- 疑似体験セットの装着方法について、高校生が事前学習する時間がとれなかったため、活動中に戸惑う班があった。
- 疑似体験の中で高校生が「どんな気持ちになるかを感じて、考えてみよう」という声かけを行うことで、気持ちの変容を認識させようとしたが、「できた・できない」という結果にとられる小学生もいた。
- ふりかえりや気づきのまとめにおいては、高校生のアプローチの仕方によって、学びの深まりに差異があった。この体験を通して、「小学生に何を学んでほしいのか。そのためにどのような働きかけ、声かけが必要か」をしっかりと考えさせ、事前に確認する必要がある。

6. 参加者の声

（小学生）

- 装具をつけて歩いたり、階段を上ったりすることはとても大変でした。街中で高齢者に出会ったら声をかけたいと思います。
- こんなに丁寧にいろいろな体験をさせてもらってありがとうございます。
- 高齢者の気持ちを感じることができた。優しくしたいと思います。

（高校生）

- 一人ひとりとじっくり関わることができ、前回よりもたくさん会話しながら活動ができた。活発な子どもやおとなしい子どもがいるので、その子にあった声かけを工夫したい。
- 活発な子どもが安全に活動できるか不安だったが、しっかりと手をつないでくれてうれしかった。
- 説明や注意事項をしっかりと聞き、私たちが正しく理解していないと良い活動にならないことを実感した。

7. 担当者としての感想

高校生が、日ごろ自分たちが学んでいる「福祉の学習」を小学生に教え、より深く理解してもらうための工夫や配慮について考えていくことは、自分たちの知識を再確認し、理解を深める良い機会となった。



●福祉を学ぶ高校生から小学生へのアプローチ

小学生と高校生の交流をとおしての実践は高く評価されます。高校生は自ら学んでいることを小学生にわかりやすく工夫し伝えることで、主体性を生み、「福祉」についてさらに理解を深めることにもつながります。

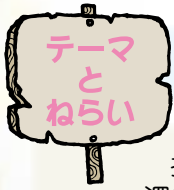
高校生が小学生に分かりやすくするために、言葉や装着方法の配慮等をイメージし、事前学習しておくことが重要です。高校生にとっては自己肯定の意識が芽生え、

小学生にとっては将来の自分の姿を想像しながら交流でき、双方にとって有意義なプログラムになるでしょう。

●福祉のイメージを広げよう

高校生へは「福祉」を高齢者や障がい者に限定せず、子どもも対象とした形で福祉を理解できるよう仕掛ける必要があります。自分自身も福祉の対象になることを「ふりかえり」の時間に加えることで、プログラムに深みが増すでしょう。

鳥取市社会福祉協議会



高齢者の体を疑似体験しよう

授業で高齢者の体の変化等について学習。高齢者疑似体験を通し、体感することで学習を深め、福祉の心を育む。

参加対象

・高等学校2年生
(3クラス)

実施主体

・高等学校

協働実践者

・市社協 総合福祉センター

◆プログラム

1. 目的

「保健」で、「高齢者のための社会的取り組み」を体験型授業により実施することで理解を深める。机上で想像している高齢者の体の変化について、高齢者の体（動きにくさ、見えにくさ、聞こえにくさ等）を疑似体験し、福祉や介助について考える。

2. 内容

時間	内容
45分	(1) 高齢者の体の変化について学習しよう 3～4人のグループに分かれ、一人が高齢者疑似体験セットを装着し、コースを順番にすすむ。 関節の動きにくさやバランスのとりにくさ、見えにくさや聞こえにくさ、普段の動作との違いを体験。 <コース> ①床に座り、立つ ②階段の昇降 ③マットの上を歩く ④財布から小銭を出す ⑤本読み（教科書） ⑥箸・スプーンを使った基石の移動 ⑦キャッチボール（やわらかいボール）
45分	(2) ふりかえり

3. 活用した地域資源等

4. 工夫した点

- 財布から小銭を出したり、キャッチボールをしたりと日常の何気なく行っている動作を取り入れ、体の動きにくさや感覚的に物体を捕らえる精度の低下等を実感しやすいよう工夫した。



財布から小銭を取り出す様子



キャッチボールをする様子

5. ふりかえり（成果や課題等）

（成果）

（高等学校）

- 実体験に勝るものなし。実感することで、多くの生徒に動機づけを行えた。

（市社協）

- 体験途中に「大変だ」という声が聞かれ、生徒たちが体感できたように思う。

（課題）

（高等学校）

- 時間のかかる体験内容の実施場所を増やす等工夫が必要だと感じた。

- 実習のふりかえりの時間を市社協の職員と対話する形で行えれば、より深い学習ができたのではないかと考える。

（市社協）

- 用具の装着が上手にできておらず体験途中で直す場合があった。また、机上体験スペースにボールが飛ぶこともあり、学習の援助態勢やコース配置に課題を感じた。

6. 参加者の声

- （高齢者に）自分ができることがあれば何でもしたい。将来、自分が年をとった時も人から助けてもらいたい。

7. 担当者としての感想

（高等学校）

1グループを3名（多いところは4名）とし、45分間で実施。体験の内容説明と体験時間で、授業終了時間となり、ふりかえりは、次回に持ち越した。外部の職員と対話できる機会をよりいかにするためにも、授業2コマ連続で行えると、体験も全員が十分にでき、ふりかえりもできる完結型の授業になったと思う。

（市社協）

今回の体験を通し、いろいろな方が地域に住んでいることを知ってほしい。今後、体を思うように動かさない方と遭遇した時には、今回の体験を思い出し、援助ができなくとも、声をかけることができればと感じた。

高校の授業時間内という制約があり、十分な学習ができなかったという反省と、可能であれば同学年すべての生徒に体験してほしいという希望がある。今回は相談から実施までの期間が1週間と短かったため簡単な打ち合わせしかできなかった。打ち合わせの期間が取れば学校と計画的に検討できたと思うので、次の機会に活かしたい。



●福祉の先人ゆかりの学校での取り組みとして

2014年に生誕100年を迎え「障害児福祉の父」と称された同校出身の糸賀一雄さんや、障がい者理解に関わる内容を加えると、学校独自のプログラムになるでしょう。プログラムを作成するにあたっては、福祉学習の素材は身近なところや地域の中にあることを

心に留めておく必要があります。

また、高校生にはワンステップ上のプログラムが期待されます。家庭や地域・社会の一員としての自覚をもち、支え合って生活することの重要性を認識する視点が必要です。短いプログラムですが、このような視点を持って学校側と十分話し合いをし、社協から提案・助言できるよう期待します。

湯梨浜町社会福祉協議会



高齢者や障がいのある人が安心して暮らせるサポートを考えよう

体験を通して身体の変化と心理的な変化に気づき、老いることや障がいがあることなどのか理解する。

参加対象

- ・児童・生徒
- ・PTA

実施主体

- ・社協
- ・学校
- ・PTA

協働実践者

- ・高齢者疑似体験インストラクター

◆プログラム

1. 目的

老いや障がいによって、不便なことがでできます。
どんな不便さがあるのか気づき、解決策や自分にできることを考える。

2. 内容

時間	内容
90分	<p>(1) いろんな疑似体験をしてみよう</p> <ul style="list-style-type: none">・高齢者疑似体験・アイマスク体験・車いす体験 <p>○老いや障がいによる不便に気づく</p> <p>○不便であってもできることがあり、どうしたら不便でなくなるか、意見を出し合い考えを深める。</p> <p>○相手によって関わり方が違ってくことに気づく。</p> <p>○誰もが暮らしやすい環境について考える。(バリアフリーへの取り組み)</p> <p>○ふりかえる：自分にできること、してみたいことなどや、体験から変化したことをまとめる。</p>

3. 活用した地域資源等

- 社協へ内容の相談
- 疑似体験セットの貸出
- 地元の民生児童委員へ協力依頼
- 福祉学習サポーターへ協力依頼

4. 工夫した点

- 学校の福祉教育担当教員をとおして、保護者の体験ができないか話し合う機会を設けるために何度も連絡をとり、足を運んだ。
- 社協職員にも学校保護者がいるのでPTAへ提案したり福祉教育の取り組みを紹介したり呼びかけを行った。
- 教員との打ち合わせは、時間的に十分なゆとりを持って、お互いしたいことやできることを確認する。

- プログラム実施の中で児童・生徒からでた意見や気づきを、体験の中で実施し学びを深める。
- 高齢者疑似体験の内容で身体の変化（歩く、起きる）の体感と日常生活動作の体験をすることで、より現実味のある体験となり気づきも多く活発な意見がでる。
（内容：自動販売機からジュースを購入。字の読み書き等）

5. ふりかえり（成果や課題等）

（成果）

- 毎年実施しているので学校と社協のコミュニケーションが図れてきた。
- 児童・生徒が学ぶことにより教員の理解が深まり保護者の体験へと広がった。
- 体験から学んだことを更に深めて、学習発表会で地域住民・保護者の方へ発表することで福祉についての関心が高まった。

（課題）

- 児童においては、時間数の確保が難しく体験で終わってしまう。交流までつなげたい。

6. 参加者の声

- 疑似体験では、最初のイメージが「不便になる」・「できないことが多い」等あったが、工夫したらできないことも何とかできることに変わるということに気づいた。たとえ間違えても大きな失敗でなければ、自分の感情次第では前向きになれる。
- 目が見えにくい状態等を体験して、表示物の色が見えたり見えにくかったりすることに気づいたことで改善策が考えられる。

7. 担当者としての感想

体験したことを誰かに発表することによって事前に調べて、ふりかえりを児童・生徒が真剣に考えいろいろな意見を出していた。

毎年、体験学習をされる学校については、保護者の参加や発表会の実施により広がりがでてきた。

次回から企画の段階で児童・生徒と一緒に内容等考えることになり、福祉教育は学校だけでなく、地域住民の方が一緒に取り組むという考えに変化してきた。



●家族と共有する福祉学習

福祉学習への取り組みは、学校だけではなく、社協・地域が協働・連携していくことも必要な視点です。こ

の実践では、学習対象が児童だけでなくPTAにも及んでいるところが評価できます。福祉学習に親子で参加することにより、学んだことを学校内に留めず、家庭内でも共有していくことが大切です。

大山町社会福祉協議会

テーマ
と
ねらい

高齢者の気持ちになって

高齢者疑似体験セット（つくし君）を装着し、見えにくさ、動きにくさを体験することで高齢者への理解を深める。また、地域のインストラクターの指導を受けることで地域との関わりを深める。

参加対象

・小学生（3・4年生）

実施主体

・小学校（2校）
・町社協

協働実践者

・高齢者疑似体験インストラクター
（福祉学習サポーター）

◆プログラム

1. 目的

疑似体験を通し地域の高齢者・障がい者の気持ちを理解し、自分たちにできることを考える。

2. 内容

時間	内容
15分	（1）高齢者疑似体験セット（つくし君）について学習 疑似体験の目的、使用方法、使用効果について理解する。
60分	（2）体験から高齢者のことを知る 実際に疑似体験セット（つくし君）を装着し、加齢によって生じる身体及び心の状態を体感する。 ①時計をみる ②本を読む ③色鉛筆を取り出す ④目覚まし時計の音を聞く ⑤階段を下りる 等
25分	（3）ふりかえり 疑似体験セットを装着して体験した事柄についてみんなで話し合う。家族、地域で高齢者の方に対して、これから何ができるか考えてみる。

3. 活用した地域資源等

- 県社協から つくし君を（6セット）借用

4. 工夫した点

- 疑似体験セットを装着して、普段自宅や学校の生活の中で行っている動作を行うことで、より実感できるよう工夫した。
- 教員や社協職員の指導だけでなく、地域の方に加わっていただくことにより一人ひとりの児童に指導できるよう工夫した。



5. ふりかえり（成果や課題等）

（成果）

- 地域・学校・社協との連携が深まった。高齢者・障がい者への理解が深まった。

（課題）

- 授業時間という限られた中での活動のため、慌ただしい場面があった。

6. 参加者の声

（児童）

- 高齢者の身体のことをよく分かった。
- 「何かお手伝いすることはありますか？」などの声をかけたい。

（インストラクター）

- 子どもたちと一緒に学ぶことができ、とても嬉しく思っている。
- 今後も活動を続けていきたい。

7. 担当者としての感想

以前より学校から疑似体験等の福祉教育の授業の依頼を受け活動してきたが、今年度は住民の方を対象に高齢者疑似体験インストラクターを養成し、社協と学校だけでなく地域の方にも入っていただくことで、きめ細やかな指導や関わりができたと思う。

今後もインストラクターやボランティアに関わっていただきながら、いろいろな場面で学校との連携を深めていきたい。



●地域のボランティア （福祉学習サポーター）との協働

高齢者疑似体験インストラクターを地域の中で養成し、養成で終わることなく、学校や地域での福祉学習へ関わってもらおう等、「活動の場」をつくっているところが評価できます。学校の授業に地域の方が入っていくことによって、児童はもちろんのこと、教員、社協関係者にとってボランティアがより一層身近な存在になるでしょう。地域で取り組む福祉学習を進めるためにも、今後「高齢者疑似体験」をきっかけに、地域の中で福祉についての学びが行われることを期待します。



八頭町立隼小学校



「あいサポートキッズ」になる

「あいサポート運動」の趣旨を理解し、障がいのある人等いろいろな立場の人と共に生きる社会をめざして、自分たちにできることを考え行動しようとする気持ちを育てる。

参加対象

・小学4年生

実施主体

・学校

協働実践者

・県社協
・町社協
・聾学校

◆プログラム

1. 目的

障がいのある人との関わり方を考え、自分も社会の一員として、相手の立場に立った行動をする。

2. 内容

時間	内容
45分	(1) 「あいサポート運動」ってなんだろう 県社協の方を招いて、あいサポート運動についての話を聞き、「あいサポートキッズ」になりたいという目標を持たせる。
45分	(2) 手話を体験しよう 県社協の方の話から興味を持った手話を、鳥取聾学校の教員を講師にして体験する。
90分	(3) 鳥取聾学校ってどんなところだろう 聾学校を訪問し、施設見学を行いバリアフリーについて理解を深めたり、聾学校の友だちと出会ったりする。
90分 (交流のみの時間)	(4) 聾学校の友だちと交流しよう 手話をはじめ、相手とコミュニケーションをとるための工夫を「あいサポート行動」として考え、実践に向けての練習をして交流会に臨む。
45分	(5) 「あいサポートキッズ」認定式を開こう 県社協の方を招き、自分たちの学びや成長を発表し、これからの生活に生かそうという意欲を高める。

3. 活用した地域資源等

- 聾学校の協力

4. 工夫した点

- 「あいサポートキッズ」になるという明確な目標を設定し年間を通しての学習を設定した。県社協の方を認定員にお願いした。
- 聾学校の児童との交流は回数が限られるので、児童だけでなく聾学校の聴覚障がいのある教員とも継続して交流した。(直接会うだけでなくFAXやメールを活用した)

- 興味を持った手話は、交流等に合わせて必要性を強調し、交流の時には積極的に手話を使った。
- 手話の歌を歌うことで、知っている手話の数を増やしていった。
- 手話への興味関心や記憶には個人差があることに配慮し、ドリル的な反復練習で無理に覚えさせることはしなかった。手話だけでなく、ゆっくりはっきり話す場面も見られた。

5. ふりかえり（成果や課題等）

（成果）

- 「あいサポート行動」をする対象（聾学校の教員や友だち）が明確だったので、意欲的に相手に伝わりやすい行動を工夫しようとし、手話をたくさん覚え、積極的に手話を使ってみようとした。相手の立場を考え、一歩踏み出して行動することで相手と気持ちよく通じ合えることが理解できた。

（課題）

- この学習では、実際に聴覚障がいのある人の協力が欠かせない。その協力者を確保すること。そしてその方と継続して交流する条件整備ができるかが課題である。

6. 参加者の声

- 学習の感想を言う時に、手話を何個も入れてやってみて、何個か失敗して「ああ、またまちがえちゃった。」と思ったけど、聾学校の聞こえにくい先生が、「手話、すごいね。」と言ってくれたのでうれしかったです。ゲームをする時も、「がんばろう」と手話を使ったのですが、ちゃんと通じたのでよかったです。
- 聾学校には、小学校にない物がたくさんありました。廊下に電子掲示板や時計がたくさんあって聞こえにくい人にとっても、便利なことが分かりました。
- （聾学校のお友達に）好きな動物を聞いてみると、魚まで教えてくれたのでびっくりしました。ゲームでは、説明がちゃんと通じたのでよかったです。

7. 担当者としての感想

相手と通じ合いたい、仲良くなりたいという気持ちが活動の原動力になっていると感じた。同じ障がいでも人によって違うことを感じることができ、「～障がい」と一括りにせず、一人ひとりを理解しようとする気持ちも育っていると感じた。



聾学校の教員と一緒に伝え合う工夫について考える児童



聾学校の学校祭で手話を交えて交流で学んだことを発表



●「あいサポート運動」をきっかけとした取り組み

「あいサポートキッズになろう」という明確な目標を立て、プログラムに盛り込んであります。聾学校と交流するため手話を覚えたり、伝わりやすいように工夫したり、自分にできることを見つけ実践していく中で自信がついた児童もいるでしょう。そして、聾学校の児童生徒との交流まで発展させた取り組みが評価できます。

今後、聾学校にとどまらず、盲・知的障がい・肢体不自由・病弱の特別支援学校や特別支援学級との交流に置き換えて、「あいサポートキッズ」の取り組みが展開されることを期待します。

「あいサポートキッズ」

…小学校4年生から6年生位を対象とした、「あいサポート運動」です。この運動は、誰もが、様々な障がいの特性、障がいのある方が困っていることや、「ちょっとした手助けや配慮」等を実践することにより、障がいのある方が暮らしやすい地域社会（共生社会）を実現することを目的としています。障がいの特性や配慮をまとめたDVDやパンフレットを活用して研修を実施します。

八頭町立八東小学校



「ふるさと八東を見つめて」～誰もが住みやすい町・八頭町へ～（総合的な学習の時間）

バリアのない八頭町にしていくために、車いすバスケット交流や地域のバリアフリー調査隊等の活動に取り組み、住みやすい町づくりに向けて、自分たちのできる行動へつなげる。

参加対象

・小学5年生

実施主体

・小学校

協働実践者

- ・車いすバスケットボールクラブ
- ・公共施設
- ・地域福祉センター
- ・あいサポート研修指導者

◆プログラム

1. 目的

バリアは町の中だけでなく、自分の心の中にもあることを実感し、障がいのある方や高齢者との交流を通して、バリアのない町づくりへの理解と関心を高め、具体的な関わり方や支援の仕方を身につける。

2. 内容

時間	内容
45分	(1) 学校の中のバリアを体験しよう 介助する者、介助される者、観察者となり、学校の中で車いす体験を行う。
45分	(2) 車いすバスケットを体験しよう【1回目の交流】 ・車いすバスケットボールの競技の説明を聞き、障がいのある方と一緒に体験する。 ・学校の中のバリアや車いすバスケットボールを体験した感想を伝えたり、障がいのある方から町づくりへの思いを聞いたりして、バリアをなくすための活動内容を考える。
90分	(3) 地域のバリアフリー調査 (郵便局 八東駅 中央人権啓発センター バス停 道の駅 徳丸駅) さまざまな障がいのある方をイメージし、地域のバリアやバリアフリーについて調査する。
90分	(4) バリアフリー調査のまとめ【2回目の交流】 ・点字、点字ブロック、スロープ、多目的トイレ、ハートフル駐車場、ノンステップバス等についてまとめたバリアフリー調査結果や感想を障がいのある方に伝える。 ・障がいのある方が、普段町の中で困っていることや感じていること等について聞き取り、八頭町をもっとバリアフリーの町にしていくための改善点について話し合う。
60分	(5) あいサポートキッズ研修 ・あいサポート運動の意義や活動について知る。さまざまな障がいの内容や支援の仕方を理解し、相手との関わり方を考えたり、実際に手話や筆談を体験したりする。 ・自分たちの生活の中で、活かせる「あいサポート行動」について考え、実践する。
90分×4回分	(6) 福祉センターでの高齢者や職員の方との交流 ・ゲーム・歌・体操・クイズ等、自分たちで計画した内容で交流する。 ・高齢者とのコミュニケーションの仕方や交流して気づいたことを話し合う。 ・自分や友達の成長についてふりかえり、「やさしさ広げ隊」として活動する。
20分	(7) 地域や保護者の方に総合的な学習の時間で学んだことを発信する小学校の行事「八東フェスティバル」で、学習してきたことをまとめて発信する。 自分から友達との関わり方や言葉遣いを変えて、バリアのない人間関係をつくる。

3. 活用した地域資源等

- 地域の施設（郵便局・八東駅・中央人権啓発センター・バス停・道の駅・徳丸駅）
- 車いすバスケットボールクラブ「鳥取アローズ」（GT；福永幸男さんとの交流体験）
- 地域福祉センターでのボランティア・交流体験

4. 工夫した点

- 障がいのある方との交流を2回計画し、相手を意識する・目的を意識することを明確にさせた。
- 地域の福祉センターが開催する「夏休みボランティア体験」に参加し、高齢者や福祉センターに対する関心を高めた。

5. ふりかえり（成果や課題等）

（成果）

- 障がいのある方との出会いを通して「バリアのない社会」への意識を高め、自分たちの身近な課題として解決に向けて追究することができた。

（課題）

- 高齢者との交流体験を活かし、次の交流活動について考えていくことが必要である。例えば、幼児との交流等を今後考えたい。

6. 参加者の声

- 交流体験をして、周りの人と協力して自分から行動することができるようになった。
- 以前は、障がいのある方に対して特別な見方をしていたが、交流して自然に接することが大切だと思った。

7. 担当者としての感想

- さまざまな方との出会いや現地調査に取り組むことで、相手意識や目的意識が明確になり、人と関わる力や相手の思いを理解する力も高まり、自信をもつことができた。
- 福祉センターでの交流は、高齢者も毎回楽しみにされていた。



車いすバスケットボールでの交流



あいサポートキッズ研修



●「福祉」の視点でわが町をとらえる

福祉学習では、体験と交流を組み合わせたものが多く取り組まれています。このプログラムでは次での段階として地域に出かけ、学んだことを発表する場を設けています。普段何気なく生活している地域のなかにも、人によってどのような困難さがあるかを知ることができ、また、どのように乗り越えていくことができるかを考えることにつながるでしょう。

また、地域の改善点を行政や関係機関に伝え「これらにむけて」という視点を盛り込むことも期待できるでしょう。

現在、時代は「バリアフリー」から「ユニバーサルデザイン」を基調とする流れになっています。仮に「バリア」が残っていても、それを乗り越える人々の支え合いの心が醸成されていくことも必要です。

～ユニバーサルな町・八東～



月	日	乗車	下車	乗車	下車
0	1	27	32		
0	2	27	32		
0	3	27	32		
0	4	27	32		
0	5	27	32		
0	6	27	32		
0	7	27	32		
0	8	27	32		
0	9	27	32		
0	10	27	32		
0	11	27	32		
0	12	27	32		
0	13	27	32		
0	14	27	32		
0	15	27	32		
0	16	27	32		
0	17	27	32		
0	18	27	32		

時刻表
ハンデカリアス
おりましたか

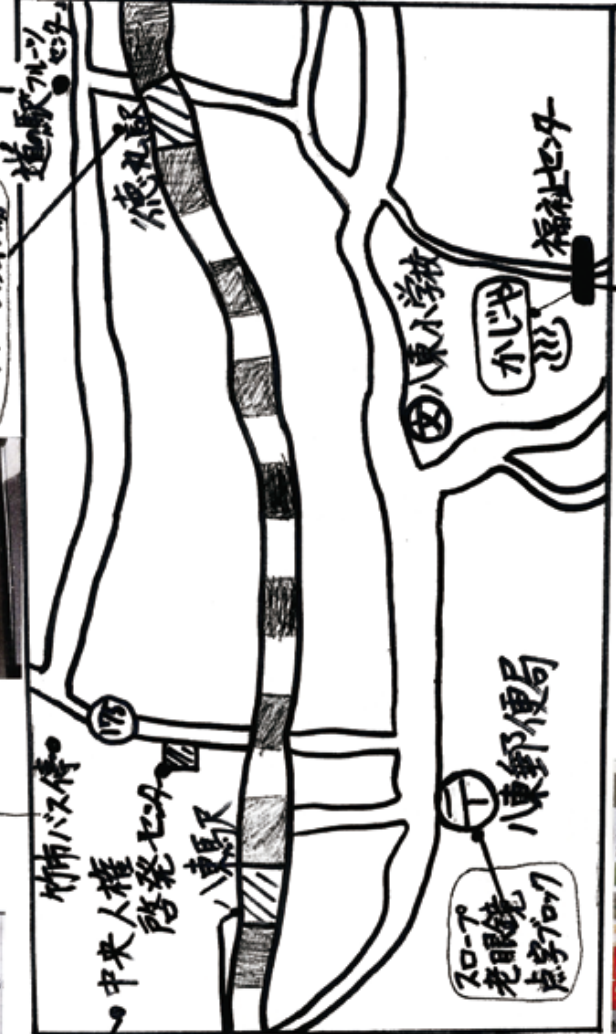


手すり
多目的ML
点字点字
エバ-9

スロー
手すり
多目的ML
点字点字



スロー
手すり
多目的ML
点字点字
エバ-9



八東地域
バリアフリー
マップ。



○このマップは、地域のバリアフリー調査をして5年生が作成しました。バリアをなくすためには、一人一人のバビの中にやさしさを持つことが大切です。

＜H26.2.10作成 八東小学校5年生 総合的な学習の時間「ふるさと八東を見つめて」～人にやさしい町づくり～＞



画面越しのコミュニケーションが孤立を招く？ (福祉教育研究委員会でのつぶやきから)

今、街の至るところで、スマートフォンや携帯電話の画面を見つめる人たちを見かけます。ケータイやスマートフォンの開発が進み、ソーシャルネットワーキングサービス、略して『SNS』が多くの人に利用されるようになりました。

『SNS』とは、人と人とのつながりを促進・サポートする、コミュニティ型のWebサイト。インターネットを介して、友人・知人間のコミュニケーションを円滑にする手段や場を提供し、人と人をつながりを通じて新たな人間関係を構築する場を提供してくれます。

ケータイがあれば、どこでも誰とでも繋がれる『SNS』の普及により、人間同士のコミュニケーションも変化しています。一度も会ったこともなければ、まったく知らない人とも簡単に「友達」になってしまうこともあります。実際、学校の入学式や企業の入社式の前に、既に新入生や新人同士がSNSでつながっていることも多くなりました。

大人も子どもも、コミュニケーションの在り方が変容して、face-to-face（フェイス トゥ フェイス）の関係性が築きにくくなっています。まさに、人間関係の築き方が、お互い顔を合わせてではなく、ケータイ等の画面越しになっています。

こうした、人間的なつながりが失われることで、かえって「孤立」化しやすい土壌ができてはいないでしょうか。SNSの世界ではボタン操作一つで、ネット上の「友達」を拒否・拒絶することができ、その世界での人間関係を断つことも容易になっています。しかし、「非公開」の場における「孤立」化は、なかなか表面化しないために周囲が気づくこともできず、さまざまなトラブルにもなったりします。

福祉のめざす方向として、社会的に排除されていた人々を包み込む「ソーシャルインクルージョン」の実現が求められています。ところが、周囲の社会から排除を強いられた人々とは違い、現代社会の「孤立」は自分の力で行うことも可能であるため、支援の手が届かなかったり遅れたりすることが予測されます。

そこには、ネットの世界での人のつながりが「オンライン」であるのに対し、生身の人間的なつながりが「オフライン」にならないようにする、新たな地域福祉の課題があるかもしれません。それに対応していく取り組みが、これからの福祉教育・福祉学習の課題ではないでしょうか。

三朝町社会福祉協議会



福祉体験を通して“地域のいろいろな人とかがわろう”

地域に住むいろいろな人と共に暮らしていくために、自分にできることを考え、実行に移せる力を身に付け、「心のバリアフリー」を育む。

参加対象

・小学5年生

実施主体

・小学校
・町社協
・地域住民

協働実践者

・町社協 ・小学校
・地域住民
・町立福祉センター

◆プログラム

1. 目的

福祉体験・交流を通して、地域の高齢者や障がい者の立場を理解し、「思いやりの心」を育み、福祉に対する理解と関心を深める。

2. 内容

時間	内容
45分	事前準備 ①小学校での事前学習 小学生が福祉について事前に質問を考え、福祉センター職員に事前にわたす。 ②人材紹介 小学生の事前学習の中で出た、三朝温泉街を流れる清流・三徳川に生息する、かじか蛙の生息環境についての質問に対して、「三朝温泉かじか蛙保存会」の会員の方を紹介する。
50分	(1) 町立福祉センターを訪問しよう ・福祉センターを訪問し、施設の様子や地域には様々な人がいることを知る。 ・高齢者の生の声を聞く機会とする。 ・福祉について、事前に準備した質問等で学習する。
15分	(2) ふりかえり① 一人ひとりが高齢者に何かできることはないか考える。
10分	(3) 車いすについて学習しよう 社協職員から車いすの操作方法や注意点等を学ぶ。
30分	(4) 車いす体験をしよう 介助する側・される側、観察者のグループを作り、学校や地域の中で車いす体験を行う。
5分	(5) ふりかえり② 車いす体験を通して、一人ひとりの意見を聞き、気づいたことを話し合う。
40分	(6) アイマスク体験をしよう 介助する側、される側のペアを作り、学校の中や地域の中を体験する。
5分	(7) ふりかえり③ 一人ひとり感じたことを聞き、目の不自由な人に、何かできることはないか話し合う。
30分	(8) 目の不自由な人と交流をしよう 目の不自由な人とのふれあい、お話や思いを聞いたり感じたりする。
5分	(9) ふりかえり④ ・交流を通して、気づき感じたことを話し合う。 ・自分自身に何かできることはないか考える。

3. 活用した地域資源等

- 町立福祉センター（通所介護事業所）
- かじか蛙の生息環境について、子どもたちからの事前質問があったので、「三朝温泉かじか蛙保存研究会」を紹介し、情報を提供する。

4. 工夫した点

- 小学校から福祉教育（体験）の依頼があり、単に体験をするのではなく、子どもたちの自主性、自発性を引き出せるように、「事前学習～体験（できれば校外に出て）～ふりかえり」という流れのなかに、障がいのある方の参加を得て実施してはどうかと提案をした。

5. ふりかえり（成果や課題等）

（成果）

- 車いす体験・アイマスク体験を通して、障がいのある人や高齢者がどんなことに困り、どんなことに苦労するのか身を持って理解することができた。
- 障がいのある人を学校に招いて体験談を聞いたり、町立福祉センター（デイサービス）へ訪問したりして、思いや願いを知り、自分と異なる生き方に触れることができた。
- 自分たちの地域にある施設（町立福祉センター）を身近に感じる事ができた。

（課題）

- 子どもたちの興味・関心が持続できるような支援・活動を充実させる。
- 障がいのある人や高齢者への理解が言葉だけに終わらず、自分たちの生活に実践として活かせるような、体験重視型から脱却した取り組みも行っていきたい。

6. 参加者の声

- 階段の時は、すごく重くて何人もの人で手伝ってあげないといけなかった。でも、手伝った後は、「助けてあげてよかったな」という気持ちになった。
- 見えていない人と一緒に歩く時、わかりやすく伝えるにはどうしたらいいか、どうやって伝えたらいいかを考えながらサポートすることに気がついた。
- 目が見えなくて不便だけかと思っていたけど、生き物の声を録音したりして普段の生活を楽しんでおられてすごいと思った。
- 目の見えない人や困っている人に会ったら、助けたい。

7. 担当者としての感想

「身近にいる人」を思いながら体験をしているのが、良い結果につながった。



車いす体験の様子



アイマスク体験の様子



目の不自由な人との交流



●「違い」と「同じ」を認めあえること

「目が見えなくて不便」と考えるのがすべてではなく、どのように生活の質を高めているかという点で、かじか蛙の鳴き声やその生息環境についての理解にも及んだ点は注目されます。

「～してあげる」という意識ではなく、ともに社会の中で生きていく仲間として、相手を思いやり手助けしたり、自分のこれからの生き方を考えることにつながれば、さらに深みを増すでしょう。

障がいのある、なしにかかわらず、一人ひとりの「違い」や「同じ」、多様性を認めあうことが大切な視点となります。

大山町社会福祉協議会



自然の大切さ・自然の恵みを知ろう

自分たちの生まれ育った地域を知ること、自然に親しみ、守ることの大切さを知る。

参加対象

・町内小学生
(1～6年生)

実施主体

・町社協

協働実践者

・ボランティア(学習支援)
・「大山ブナの森を育てる会」

◆プログラム

1. 目的

地域のボランティアとふれあいながら、大山の自然を知り環境を守ることの大切さを知る。
また、自分の町の良さに気づく。

2. 内容

時間	内容
60分	(1) 大山の水について知ろう 大山ブナの森を育てる会から説明を受け、実際に湧き水にふれてみる。(大山地蔵滝)
60分	(2) 大山ブナの森について知ろう ブナの森の保全について学習し、実際にブナの森に入ってみる。(大山横手道)
30分	(3) ふりかえり それぞれ感想を話し合い、発表する。

大山町社会福祉協議会 サマースクール(年1回)

3. 活用した地域資源等

- 福祉学習サポーターを含む(学習支援)ボランティア
- 「大山ブナの森を育てる会」

4. 工夫した点

- 実際に大山でボランティア活動しておられる方からお話を聞いて、一緒に体験をすることでより、自然の大切さや大山の恵みにより関心が深まるよう工夫した。



5. ふりかえり（成果や課題等）

（成果）

- ボランティアの方と一緒に自然に親しみ、話を聞くことで地域との関わりが深くなった。また、自分たちの町（大山）の知らない部分に触れることができた。

（課題）

- 多くの参加者のうち、低学年が3分の2だったこともあり、ボランティアスタッフの人数を増やし、きめ細やかな配慮をする必要があった。

6. 参加者の声

（児童）

- 夏なのに水はとても冷たかった。
- とても綺麗な水が流れていた。
- プナの森を守ることで、水の大切さを知ることができた。

（ボランティア）

- 子どもたちと一緒に活動する事で、元気をもらった。
- 今後も機会があれば活動を継続したい。

7. 担当者としての感想

子どもたちの生き生きとしたまなざしと、それを受け止めて下さるボランティアの姿を見てとてもほえましく感じた。地域の中で、子どもは学び育つのだなと感じることのできる事業だった。

今後もボランティアや地域の方の協力を得ながら、事業を継続していきたい。



ここが いいわ!

● 地域愛から「普段の暮らし」を考える

自然を知り環境保全について学習することで、生命の大切さを学ぶこと、ひいては福祉の心を育てることにつながるでしょう。また、地域理解の一環としても、ボランティアと一緒に活動することで地域への愛着も高まります。現在の姿だけでなく、過去の歴史やこの地域における意味等とも結びつけ、そこに人々の暮らしや思いを重ねていく学習が福祉理解の前提としても必要となる視点でしょう。

未恒地区子育て支援委員会(鳥取市)



わくわく交流ひろば

昔の遊びを通して地域の高齢者と仲良くなろう。

参加対象

- ・小学生 ・PTA
- ・地区敬老会他
- ・各種団体（地域住民）

実施主体

- ・子育て支援委員会

協働実践者

- ・小学校 PTA、児童、教職員
- ・地区公民館 ・地区社協 ・老人クラブ
- ・民児協 ・交安協 ・青少年育成協
- ・更生保護女性会

◆プログラム

1. 目的

遊びを通して、子ども、保護者、地域、学校がふれあい、つながり合って顔見知りになり、ともに地域の子どもたちを見守っていこう。

2. 内容

時間	内容
	○計画・企画
60分× 6回/年	(1) 「わくわく交流ひろば」で地域の人と交流しよう 年6回学校で地域住民の参加を得て、昔遊びや手づくり工作を実施する。 年間6回（水曜日） 6/26、7/10、9/11、10/23、11/13、12/11 活動時間／12時55分～13時55分 場 所／未恒小学校（校庭、中庭、大黒様ホール、体育館） 内 容／わらべうた遊び、おはじき、けん玉、あやとり、お手玉、折り紙、だるま落とし、オセロゲーム、将棋、囲碁、貝殻アート、編み物、コマ回し、缶ぽっくり、一本歯ゲタ、羽子板、ペットボトルロケット、物づくり教室
	(2) ふりかえり

3. 活用した地域資源等

●子育て支援委員会

- ・平成14年、学校週5日制になったことに伴い、公民館活動の一環として発足する。ハイキング（5月）、バーベキュー（8月）、冬まつり（2月）を開催していた。

〔構成員：公民館、自治会、体育会、児童委員、白うさぎの会、地区子ども会、Jrスポーツ協会、小学校、老人クラブ、婦人会、地区社協、交安協支部、更生保護女性会〕

- ・平成19年、子どもたちを待っているのではなく、学校へ出かけようと、小学校の昼休憩（水曜日のわくわくタイム）を使用して昔あそび教える形式に変更する。その後、物づくりも取り入れられるようになった。

4. 工夫した点

- 参加の取りまとめを PTA と地域と窓口を分けていること。
- 本年度より6年生が受付や企画等に参画してくれるようになった。
- 必ずものづくりを入れている。

5. ふりかえり（成果や課題等）

（成果）

- 子どもたちと地域の方が顔見知りになることで、学校以外の場でも気軽に安心して声を掛け合い、挨拶ができるようになった。

（課題）

- 運営方法が未だに定まっていない。
- 参加者の減少、内容のマンネリ化、いつも同じような顔ぶれになっている。
- 地域の方に小学校の現状を知っていただくのにより機会だと思っている。



6. 参加者の声

- 子どもたちの楽しそうな顔を見ることができてよかった。
- 子どもたちから挨拶をしてくれて、とても気持ちがいい。
- 子どもたちが地域の人と触れ合い、大切にされている姿を見て安心した。
- 登校する時は、元気のない表情の子が多いが、活動している時は元気で楽しそうな顔を見ることができてよかった。

7. 担当者としての感想

- とにかく人数集めが大変。400名近い児童に対して毎回40名程を集めるのがやっとなので、保護者にとっては、平日の昼という非常にに出にくい時間帯となっており、運営上の課題である。子どもたちの無邪気な様子に癒され、楽しく時間を過ごしていただけるよい交流だと思っている。
- 教員との交流も普段はなかなかできないので貴重な時間である。子どもたちも普段とは違う教員方の一面に触れることができる。

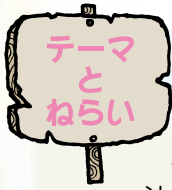


●地域と学校のコラボレーション

地域と学校が一体となり実施されていることに大きな意味があるでしょう。また、高学年が行事を企画をしたり主体的に関わることで、自信を持ち自己有用感の醸成にもつながります。また、この取り組みは、子どもたちはもちろんのこと、地域の人たちにとっても活力を生み出す源になっているはず。周辺には障がい者支援施設もあり、施設入所者・利用者もまた地域の一住民として交流が深まれば、「ともに生きる社会」の縮図が生まれるのではないのでしょうか。



倉吉市成徳公民館



元気なときに考えておこう 必ず役立つ！やさしい法教育講座

安心して老後を過ごすために必要な法律を学び、自分自身の希望や思いを確実に伝える方法を考える。

参加対象

- ・高齢者 ・民生委員
- ・社会福祉関係者
- ・地域住民

実施主体

- ・公民館
- ・老人クラブ

協働実践者

- ・公民館 ・老人クラブ ・社協
- ・民生委員 ・地域包括支援センター
- ・相続サポートセンター行政書士
- ・ファイナンシャル・プランナー

◆プログラム

1. 目的

高齢者の暮らしの不安を少しでも解消するために相続、遺言、生前贈与等に関する法律を知り、エンディングノートの必要性和その活用法を学習する。

2. 内容

時間	内容
70分	(1) 法律について知ろう 相続・贈与に関する税制改正の予定について、内容を知る。 ・税の改正ポイントを学習し、高齢者層は特に相続対策を考える必要があると理解する。 ◇相続税と贈与税の関係 ◇生前贈与のパターン ◇事例紹介
30分	(2) 自分の思いを残すことを考えよう これまで過ごしてきた人生をふりかえり、自分自身の希望や思いを考え確実に家族へ伝える方法として、遺言書とエンディングノートの違いや注意点を理解し、思いを記録に残す必要性を考えてもらう。この講座をきっかけにして、元気なうちに相談したり行動することが老後の安心に繋がることを理解してもらう。
20分	(3) ふりかえり 隣の人と一緒にエンディングノートの内容を見ながら気づいたことや実際にしておきたいこと、自分にできることを話し合う。
30分	(4) サポート 講師には講座終了後に参加者からの個別相談を受けてもらう。

3. 活用した地域資源等

- ファイナンシャル・プランナーが作成したプランニングノートを教材として活用した。
- 地域包括支援センター

4. 工夫した点

- 法律に関する言葉は専門用語が多いので言葉の解説を交えたり、事例は都会の話ではなく、身近に感じられることを挙げ、高齢者が理解しやすい内容にした。

- 高齢者にとって読みやすい資料を作成する。①文字は読みやすいフォントにする。②内容はポイントに絞り簡潔にまとめる。③プリントは片面刷りにする
- エンディングノートを実際に手に取り、その内容を確認することで関心を高め、隣に座った人と感想や意見を述べ合う時間をとった。

5. ふりかえり（成果や課題等）

（成果）

- ある日突然に倒れたら、葬儀後の困りごと、遺言や記録が残されていて良かったこと等の具体的な事例を紹介することで、講座内容がより理解されやすかった。また、エンディングノートについての話を聴くだけでなく、ノートを手に取り、その内容を自分で確かめることで、自分の今後を考える良い機会になり「書いてみよう！」という行動化へ繋がった。
- 地域包括支援センターの本事業に対する関心と理解があり、チラシの配布や声かけによる参加の呼びかけに協力をしていただいた。参加に繋がらなかった人でも、講座開催が周知され、一人で悩まずに相談する窓口があることを知ってもらえた。

（課題）

- 高齢者の生活不安は様々あるにもかかわらず、健康に関することに意識や関心が偏りがちである。しかし、安心して老後を過ごすためには自分の年齢や時代の変化にあわせたライフスタイルを考える必要があることを知ってもらう取り組みや事業展開を行っていききたい。

6. 参加者の声

- 遺言書やエンディングノートの必要性がよく分かった。
- 気になっていた内容だったので、講座に参加してよかった。
- 講座に参加することで、自分が用意しているものの確認ができて良かった。
- 毎年参加しているが、今年の講座が一番分かりやすかった。
- エンディングノートは遺言書と同じだと思っていたが、ノートは記録であり、記録があれば皆に迷惑をかけずに済むと思ったら、さっそく書いてみたくなった。
- 成年後見制度、戸籍問題等を学習したが、続編としてもう一度開催してほしい。
- 相続額が多すぎる事例は自分に当てはまらず、ピンとこなかった。
- 難しい説明部分を聴き直すことができず、理解できないところがあった。



ページを開く勇気のなかったエンディングノート。書いてみたくなる項目や内容に驚いた。購入希望者があればと準備したノートは完売。



「相続対策をするためには、少しでもいいから法律を知っておく必要がある」という講師の言葉には説得力がある。

7. 担当者としての感想

この講座は主に高齢者を対象としているが、「おひとりさま」である自分の老後を今から考えておこうという参加者もあり時代の変化を感じている。今後も様々な視点で法教育講座を開催し、参加者の年代層を広げていきたい。講座をとおして自分のライフスタイルを考える機会が問題解決への手がかりとなり、暮らしの不安を解消できるような取り組みをしていきたい。

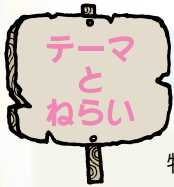


●老いて学ぶ ～暮らしに役立つ学びがここに～

人生をどのように老いていくのかというライフプランの面と、生活に法を生かすという面での実践が評価できます。地域の実情や住民のニーズをうまく吸い上げ、社会教育の場で実践されていることに意味があります。

地域包括支援センターとつながることで、これまで公民館行事に参加されなかった、幅広い関係者の参加があったり、相談する窓口が身近にあることを知ってもらえたのではないのでしょうか。また、権利擁護の視点からも、本人の特性や望む生き方、財産、関係機関のことなどを書き記すことによって、福祉サービス・支援を担う関係者等が本人に関わる際、その人らしい生き方について考えるきっかけとなるでしょう。

鳴り石の浜プロジェクト(琴浦町)



障がいのある子どもとの交流 ～特別支援学校編～

特別支援学校の生徒・教員と地域住民が、学校や地域での活動にお互いを招待したり、参加したりすることで交流を深め、地域住民と特別支援学校の生徒との良好な関係を構築する。

参加対象

- ・高等特別支援学校生徒
- ・「鳴り石の浜プロジェクト」会員
- ・地域住民

実施主体

- ・「鳴り石の浜プロジェクト」
- ・高等特別支援学校
- ・地域住民

協働実践者

- ・「鳴り石カフェ」 ・社協
- ・介護老人福祉施設 ・観光協会
- ・琴浦町

◆プログラム

1. 目的

特別支援学校の果たす役割を地域住民が理解し、生徒への理解を深めるとともに、特別支援学校を地域資源として、地域活性化につながる関係を構築する。

2. 内容

時間	内容
90分	(1) 「特別支援学校」ってどんなところだろう？ 学校見学を実施し、特別支援学校の全体像と、対象学校の概要を理解する。
90分	(2) 学校公開に参加しよう ・授業の様子を参観し、生徒の様子を把握する。 ・教員から普段の生徒の様子について聞く。
—	(3) 計画を立て、交流、共同実践をしよう ・生徒の学習の成果が実践できる場の提供と、プロジェクトの会員が生徒に役立つことを出し合い、お互いに共同実践できることを計画する。 ・交流して共同実践する。 海岸・遊歩道の清掃、「鳴り石の浜カフェ」のビルメンテナンスとトイレ清掃、ランチカフェでの野菜販売、みんなで花畑の管理（「はるかひまわり絆プロジェクト」の種を植え、花を咲かせた）、校外学習—琴の浦地域巡り遠足—会員の協力で生徒実行委員会が企画等）
90分	(4) ふりかえり ・特別支援学校とプロジェクト会員とで今年の共同実践の成果と反省点について話し合う。 ・今後、特別支援学校と地域が交流・共同実践できることを検討する。
—	(発 展) ・鳴り石の浜以外の所でも地域行事に交流やボランティアの呼びかけを特別支援学校にしよう。 ・差別をなくす町民集会での野菜販売、琴浦町社協ふくしまつりでの受付ボランティア等で参加。

3. 活用した地域資源等

- 鳴り石の浜（清掃、お花畑づくりと水やリーコスモスとひまわり）
- 「鳴り石カフェ」（ビルメンテナンス、野菜販売、あいさつ、会話）

- 「カウベルホール」(差別をなくす町民集会で野菜販売)
- 町社協(ふくしまつりでの受付ボランティア)
- 校外学習(花見瀨墓地、波しぐれ三度笠、神崎神社、韓国との交流会館等)
- 「鳴り石の浜プロジェクト」

…琴浦海岸の西に位置する、花見海岸は「鳴り石の浜」とよばれており、この地域の保全や魅力を発信するために、地域住民によって結成された地域振興の活動を行うプロジェクトチーム

4. 工夫した点

- 特別支援学校の生徒の活動のよさが地域に見えるようにする。(情報発信)
- 地域住民が特別支援学校の生徒に好感が持てるようにする。(明るい挨拶、地域貢献活動)
- 生徒の自主性を大事にしながら支援を行い、よりよいものにする。(校外遠足一生徒実行委員会が企画、プロジェクト会員は相談にのり、ポイント地点でのガイド役)
- お互いに活動後の充実感があるよう、あいさつ、声かけ、お礼の気持ちを言葉にしあうよう心がける。

5. ふりかえり(成果や課題等)

(成果)

- 共に交流し、目標に向かい汗を流し共同実践を重ねることで、新設の特別支援学校と地域との関わりが深まりより仲良くなることができた。
- 共同実践により、生徒が素直で地道なこと等よくわかり、障がい者への偏見が取り除かれた。
- 相手意識があり生徒が楽しく意欲的に取り組んだ。

(課題)

- 生徒の活動が平日に制限されがちで、土・日曜日の活動は生徒が参加しにくい。
- 来年度、生徒が増えるので、新たな活動の場の提供を考えていきたい。

6. 参加者の声

(会員)花畑では、作業をお願いすると素直に生き生きと明るくがんばってくれるので、一緒に作業していて気持ちがいい。

(生徒)寒い時は大変だけど、きれいになって店の人やお客さんに喜んでもらえて嬉しい。

(教員)見られているという緊張感とリアルタイムに評価してもらえるので充実感があり、校外実習の取り組みは前向きである。

7. 担当者としての感想

- 地域活性化を目的とした「鳴り石の浜プロジェクト」と特別支援学校との距離が近く、相互の意志疎通や共同実践がよりスムーズにいったと思われる。
- 頭や言葉での障がい者理解にとどまらず、共同実践でともに汗を流し合う中で、障がい者への偏見をなくし、その良さを地域にアピールする取り組みになった。



●学校づくりと地域づくり

新たな特別支援学校の開校に向けて、この地域が取り組んだ障がい者理解は高く評価されます。障がい児教育の世界では、「学校づくりは箱づくりではない、地域づくりである」という学校づくりを行った先進地

のスローガンが知られていますが、まさにそれを思わせるようなところが、様々な取り組みに見てとれます。

●まさに「福祉」でつくるまちづくり!

単に「交流すること」を目的とするのではなく、自分たちに何ができるかをともに考え、アイデアを出し合っています。この交流で築いた学校と地域のつながりは、強い絆となるでしょう。

劇団ふきのとう



誰もが生まれた地域・自宅で暮らしたいと思える地域づくりを考えよう

介護劇を通して介護に関する情報提供を行う。地域での助け合い・支え合いの大切さを伝え病気や障がいがあっても自宅で過ごせる環境づくりを応援していく。

参加対象

・全ての住民

実施主体

・劇団ふきのとう
(ボランティアグループ)

協働実践者

・町社協

◆プログラム

1. 目的

誰もが住み慣れた地域で安心して暮らせるにはどうしたらいいのか。介護劇をヒントにみんなで地域の支え合い活動の大切さを再確認し、福祉活動の活性化を図る。

2. 内容

時間	内容
120～180分 ×1ヶ月位	(1) 企画・学習会 ○内容(テーマ)を決めよう <<テーマ>> 在宅介護や認知症、サロンの推進、孤独死等を取り上げ、当事者と地域の人たちとの関わり方のヒントを劇の中で伝える。 ・認知症の人とどう接していけばいいのか ・認知症の理解 ・閉じこもり予防(サロンへ行こう) ・悩まない・辛くならないための在宅介護 ・孤独死を防ごう ・介護用品の紹介 依頼先の希望にあわせて内容はさまざま。 ○テーマに合わせた学習会を実施しよう ○台本を作成しよう ○出演者を決め、役割分担しよう 衣装・小物の準備を行う。
	(2) 練習
20～30分	(3) 介護劇の披露 手法としては、一人の語り手が出演するすべての役者のせりふをしゃべり、それに合わせて演技する。
120分	(4) ふりかえり 発表を通しての感想を話し合う。

3. 活用した地域資源等

- 地域のボランティア会員
- 社協理事
- 民生委員

4. 工夫した点

- 身近な地域にある課題・事例を取り入れる。方言やユーモアを交えて笑って見てもらえるような劇にする。制度・サービス紹介を取り入れる。
- 劇の中で住民に気づき、考えてもらう機会とする。
- 地域で次の段階として実践してもらうようにした。

5. ふりかえり（成果や課題等）

（成果）

- 介護用品の紹介から始まった介護劇だが回を重ねるごとに台本も進化し、地域のつながりの大切さや身近な在宅介護・閉じこもり等の内容を披露することで、住民の福祉への関心が深まっている。

（課題）

- 出演者の平均年齢は75歳。今後の後継者づくり、または新たな展開を模索。

6. 参加者の声

- 地域で支え合って行くことの大切さを介護劇で上手く表現している。
- いろいろな人に見てもらいたい。とても参考になる。

7. 担当者としての感想

- 社協が住民に伝えたいことが劇の中で上手く表現できている。（役者が熱心にやりがいを持って演じている）
- 地域の仲間づくりや思いやり・支え合いの大切さを実感してもらえた。
- メンバーの体力的な不安もあるが必要とされるなら続けて行きたい。



「遠くの親戚より地域の絆」



「なんぼになってもサロンがええで」

ここが いいわ!

●介護劇をととして

介護劇そのものも特徴的ですが、劇団員が高齢者自身という点も注目されます。取り組み自体が高齢者の生きがいつくりになり、劇を通して介護を必要とする人や身近な地域での支え合いを理解していくことは、新たな福祉学習の教材にもなるでしょう。劇そのものだけでなく、脚本づくりを、地域を知る活動として活用する方法も考えられます。

また、障がい者による劇づくりも応用編として考えることもできるでしょう。

「劇団ふきのとう」

…平成13年、東伯郡湯梨浜町（旧泊村）でボランティア活動に取り組む女性たちが劇団を結成し、介護用品を紹介する寸劇をしたのが始まりです。現在、平均年齢75歳以上になるメンバー7名が、在宅介護を応援するための介護劇を行っています。

湯梨浜町社会福祉協議会



誰もがが住み慣れた地域で安心して暮らせる自治会を目指そう！

自治会の中の身近な生活の場で、住民同士がお互い支え合い・助け合い小地域福祉活動を推進する。

参加対象

- ・区民全員
- ・子どもから高齢者まで

実施主体

- ・自治会

協働実践者

- ・社協
- ・役場

◆プログラム

1. 目的

自治会の区長が会長となり、保健福祉会の役員と共に活動を企画・運営し、地域交流や異年代の交流等の機会をつくる。支え合いマップ、サロン、見守り活動を通して地域の課題を知り、お互いに協力し支え合うネットワーク活動に発展させる。

2. 内容

時間	内容
60分 /年2回	(1) 地域の福祉力を高めるための組織化 ネットワーク活動を自治会の活動としていくため区長が会長。
60分 /月	(2) 異年代交流からサロン開催へ まずは区民同士が仲よくなる。事業を通して交流。⇒交流活動の中から高齢者が中心となったサロンの立ち上げへ。 介護予防事業 毎月1回「筋肉サロン」の開始。 福祉施設めぐり(年1回)
90分	(3) 支え合いマップづくり 区長から提案：災害はいつやってくるかわからない。マップを作ってみよう。 マップを作成、図上訓練の実施。
60分	(4) ふりかえり ・図上訓練ではいざという時に動けない。実際に訓練が必要。 ・要支援者を確認したことにより、地域の課題が見えてきた。区民が何かできることはないか。
毎日	(5) 生活支援ネットワーク、見守り活動へ

3. 活用した地域資源等

- 公民館
- 社協(保健福祉会立ち上げ協力、サロンへの職員派遣、マイクロバスの貸出、住民援護器具の貸出、支え合いマップづくりの指導)
- 役場

- 地域包括支援センター（認知症予防講習会、健康チェック）
- わが町活動支援事業

4. 工夫した点

- 保健福祉会の役員会、サロン、支え合いマップづくりに職員が参加し、区民・役員に理解をいただく働きかけを行った。

5. ふりかえり（成果や課題等）

（成果）

- リハビリサロンは男性の参加につながった。健康に対する意識が向上した。継続しやすいサロンとなった。
- 支え合いマップづくりから一人暮らし世帯の愛の輪協力員の設置につながった。昼間独居や子どもたちの見守り活動につながった。
- 避難訓練活動の実施（毎年）につながった。

（課題）

- 区全体で要支援者に対する生活支援活動（ゴミ出し、雪かき、買い物支援等）につながるよう取り組む必要がある。
- 高齢者だけでなく障がい者等を交えたサロン開催にしたい。

6. 参加者の声

- 支え合いマップづくりにより、空き家が多いことや一人暮らしが多いことに気が付いた。地域の危険箇所が確認できた。
- いきいきサロンでみんなと話ができることが楽しい。開催日を心待ちにしている。休みの人を気遣い、安否確認を行っている。
- 保健福祉会の事業では、普段話さない人と話をして気軽に挨拶をするようになった。

7. 担当者としての感想

比較的地域のつながりは昔からある自治会であるが、サロンを毎月開催することにより楽しみプラス見守り・安否確認等の福祉活動につながってきている。

また、支え合いマップを作成したことにより高齢者だけではなく子どもたち等地域全体の見守り活動に広がったこと、地域の課題について区民が気づき改善に向けて取り組んでいただいたことは、保健福祉会の支え合い・助け合いの取り組みに繋がっていると感じている。



住民支え合いマップづくりの様子



●地域づくりの軸は住民の福祉

自治会は各地域によって名称や組織の姿が異なりますが、住民にとっては行政とは異なり、身近な問題や課題を住民の手により解決に導く重要な自治組織です。このような小さい単位での支え合いマップづくりや避難訓練等の地域における学びの場づくりをすることにより、地域の課題について住民が気づき、改善していくことに大きな成果があります。



災害避難訓練の様子

智頭町社会福祉協議会



高校生と地域の方との交流 ～自分たちの学んだ活動を見てもらおう～

地域の方と交流をすることで地域福祉への関心を深める。
地域で活動することにより、高校生の活動を地域の方に見ていただき、地域と学校との関わりを強化する。

参加対象

- ・高校生（4人）
- ・ミニデイ会員（5人位）

実施主体

- ・高等学校
- ・ミニデイ運営主体

協働実践者

- ・ミニデイ会員 ・高等学校教員
- ・町社協 ・地区振興協議会

◆プログラム

1. 目的

自分たちが考えたメニューを調理し、ミニデイ会員に喜んでもらう。また、高齢者との関わりの中で、コミュニケーションの方法やふるまい方を学ぶ。

2. 内容

時間	内容
120分	(1) 料理のメニューを考えよう（献立会議） 高齢者に喜んでもらえ、かつ食べやすいメニューを考える。 調理実習を通して、調理の練習をする。
300分	(2) ミニデイに訪問しよう ミニデイに併設された料理室で調理を行う。 高齢者に対し、料理の紹介をわかりやすく行う。 作った食事を一緒にとり、交流を深める中で、コミュニケーションの方法を学んでいく。 高齢者の感想を伺うことで、次回どうしたらよいかを考える。
20分	(3) ふりかえり 反省を行い、気づきを共有する。

3. 活用した地域資源等

- 共育センター（旧保育園でミニデイ開催場所）
- 地区振興協議会

4. 工夫した点

- 献立説明をする際、わかりやすく説明するように工夫した。献立を選んだ背景や、調理で工夫した点を伝え、調理している姿をイメージしてもらいやすいよう努力した。
- 高齢者の食べやすい大きさ、柔らかさにするよう心掛けた。
- だしをしっかり取ることで、塩分を控えめに調整した。

5. ふりかえり（成果や課題等）

（成果）

- 食事づくりの大変さ、作る人の気持ち、食べてもらう人への配慮等たくさんの気づきがあった。
- 普段関わりの少ない高齢者のために活動する中で、高齢者の視点に立って考えることができたと思う。
- 高齢者を思いやる気持ちを育てるきっかけになったのでは。
- 交流を通して普段聞くことのない貴重なお話を聞くことができた。
- ミニデイとしても、若い人が来ることで刺激になってよかった。地域の学校が地域に出ていくことで、連携しやすい雰囲気を作り出すことにつながると思う。

（課題）

- 調理と片づけに時間を割いたため、食事中しか高齢者との関わるの時間をもてなかったのが残念だった。
- ゲームを一緒にしたり、話の時間を長くとったりして、交流を深められればよかった。

6. 参加者の声

- 自分たちが作った食事を高齢者の方と一緒に食べることができて楽しかった。
- 喜んでもらえたのでうれしかった。
- 高齢者の方から、「こんな洒落たものは初めて食べた」と言ってもらえてよかった。
- ほめてくださったことが嬉しかった。

7. 担当者としての感想

「朝起きたらお弁当ができあがっている」という料理の経験が皆無に等しい男子高校生4名が、高齢者の方に料理をふるまう。そんな無謀ともいえる挑戦に初めは不安しかなかったが、今回の経験を通して料理の腕だけではなく、思いやりや考え方等、どんどん変化していく彼らを見ていてとても頼もしく思った。



今日のメニュー



実食



●継続的な取り組みにするために

高校生が地域に積極的に出かけていき、交流のなかで、高齢者に食べやすく、喜んでもらえる料理を提供すること等で「自尊感情」や「思いやりの心」を育てることにつながるでしょう。

発展的な応用としては、調理を高齢者とともにいたり、地域に受け継がれる食文化や、調理文化、技や工夫等、先人から受け継いでいったりすることを組み入れることにより、高校生と高齢者との自然な相互なやりとりを促すとよいでしょう。ともに作り上げるサロンを継続的に実施することが期待されま



調理

琴浦町社会福祉協議会



地域みんなが集まろう！

集落の中みんなが公民館に集まり、交流を図ることで地域福祉への理解と関心を高め、子ども会も交えて「ともに支え合おう」とする心を育てる。

参加対象

- ・サロン参加者
- ・子ども会

実施主体

- ・サロン
「ふれあい・しろはま」

協働実践者

- ・サロン世話人
- ・役場福祉課

◆プログラム

1. 目的

サロンへの企画・運営を通して、集落の高齢者・子ども会・福祉関係者等が継続的に交流を図り、地域福祉への理解と関心を高め、いきいきしたまちづくりを推進する。

2. 内容

時間	内容
120分	(1) 目的 ・3月に各層の代表者からなる世話人会(8人)で計画をたてる。 ・事業の計画は、4月の総会で会員の意見要望を取り入れるように心がける。
120分 (1回あたり)	(2) サロンの開催 学校が休みとなる夏休み期間中に子ども会と交流する。
120分	(3) ふりかえり 3月に年間の活動状況を報告し、次年度計画の参考にする。

【年間の活動内容】(※) 子ども会との交流

月	内容	月	内容
4	総会&講演会、会員同士の懇談会	10	講演会、会員同士の懇談会
5	ものづくり教室、会員同士の懇談会	11	町外研修(西部)、ものづくり教室
6	町外研修会(東部)、講演会	12	しめ縄づくり、男の料理教室、懇談会
7	子ども会との交流(※)	1	餅つき交流会(※)&懇談会
8	パーベキュー交流会(※)	2	ものづくり教室
9	山車づくり応援(※)、会員同士の懇親会	3	反省会を兼ねて懇談会

3. 活用した地域資源等

- 自治公民館（サロン会場）
- 役場の福祉担当課に、介護保険の説明をしていただく。

4. 工夫した点

- 事業の詳細については会員の意見要望を取り入れるように心がけている。
- 各層の代表者からなる世話人会での協議としている。
- 会員外の方が参加しやすいように、研修会、ものづくり教室等を積極的に取り入れている。

5. ふりかえり（成果や課題等）

（成果）

- サロンに参加することにより、住み慣れた地域で安心して暮らすための仲間づくりが推進できる。特に、男性グループのふれあいの輪が広がってきた。

（課題）

- 継続するための指導者を養成する。
- 障がい者の参加と、地域の協力システムを構築する。
- 高齢者と小学生の交流の輪をどのように推進していくか。

6. 参加者の声

- 普段出かけることもなく、毎月のサロンが生きがいとなっている。

7. 担当者としての感想

集落のリーダーが中心となり、高齢者クラブ・子ども会・福祉関係者等あらゆる層が参加し、誰でも集えるサロンとなっている。子ども会との交流はバーベキュー交流会・祭りの山車づくり・餅つき交流会等で、保護者も交え行っている。一人暮らし高齢者は嬉しそうに活気づく時である。

今後は障がい者の参加や高齢者・小学生の交流についてさらに取り組みを働きかけていきたい。



（講演会）教育委員会から「八橋4区の町なみ」についてお話を聞く



（ものづくり教室）2色のカラーテープを巻きハンガーづくりに奮闘中！



●「みんな」の意味

ふれあい・いきいきサロンに子ども会が関わっていることが特徴的です。サロンの在り方は、それぞれの

地域の実態に応じて工夫する必要がありますが、高齢者に限定せず、障がい者や子どもも含めて、それぞれの地域の特色を出した「いきいきサロン」として運営していくあり方も今後は必要でしょう。

南部町社会福祉協議会



ペットボトルキャップをワクチンに代えて世界の子どもたちを救おう！

- ・ペットボトルキャップのリサイクル活動を通じて「福祉の心」を実践活動の中から育てるとともに、気軽に参加できる子どもたちのボランティア活動の場をつくる。
- ・地域の誰でもが気軽に参加できるボランティア活動の場をつくる。

参加対象

- ・保育園児と保護者 ・小学生 ・中学生
- ・ボランティア連絡協議会
- ・いきいきサロンの皆さん
- ・地域住民

実施主体

- ・社協
- ・町内小・中学校（5校）

協働実践者

- ・保育園（4園）
- ・いきいきサロン世話人

◆プログラム

1. 目的

- 自主的に実践できる力を育てる。
- 環境について考える。
- 地域の人たちとのつながりを作る。
- ボランティア活動者を育成する。



2. 内容

時間	内容
60分	<p>(1) ボランティア活動・リサイクルについて学習する。 なぜ、ペットボトルキャップを回収するの？何になるの？小さなことから始まったことが、役に立つことや、人と人がつながることの大切さを理解する。（キャップ分別等学校での福祉委員会活動の中で社協職員がリサイクル活動やボランティア活動について説明し、理解を深める。）</p>
随時	<p>(2) 小学校・中学校は、各学校で回収・分別・発送することで自主的な活動として取り組んでいる。 発送後に何人分のポリオワクチンになるのか報告があり、自分たちが世界の子どもたちを何人救えるのかが見え、活動意欲の向上になっている。（学校以外の保育園等で集めたキャップは、総合福祉センターで回収され、学校帰りの子どもたちやデイサービスの皆さんが分別をしている。）</p>
90分	<p>(3) 回収・分別・発送だけでなく、キャップアートに挑戦することで、楽しみながらボランティア活動につなげている。 学校、福祉施設、いきいきサロンの皆さんのアートづくり参加により、子どもから高齢者まで幅広い年齢層の参加を促すことができた。イベントで展示することで、地域への情報発信となり、みんなに見てもらおうことでより充実感を味わうことができた。 ※コンパネ2枚分（180×90×2枚）あたりの作成時間</p>

○平成 25 年 11 月末南部町発送状況

ポリオワクチン：833 人分（キャップ 860 個＝1 人分）

3. 活用した地域資源等

- 各学校、福祉施設、サロン開催場所でのキャップアートづくり
- ボランティアフェスティバル、地域のイベント、学校、施設でキャップアートを展示



4. 工夫した点

- 福祉教育連絡会を通じて、学校、福祉施設等の福祉教育担当者、ボランティア担当者にリサイクル活動やキャップアートづくりについて理解と協力をいただけるように説明した。
- 社協広報紙でもリサイクル活動やキャップアートについての記事を掲載し、住民に広報した。
- 学校帰りの子どもたちが、総合福祉センターで分別作業を行えるよう準備し、環境をつくるとともに、自分がどれだけ分別ボランティアをやったかがわかるように、表にシールを貼って成果を表し、活動の継続と意欲の向上につなげていった。

【ペットボトルキャップアートづくりの取り組み】

初年度	春休み中の子どもたちに参加を呼びかけて、福祉センターで作製する。
2年目	ボランティアフェスティバルで、夏休みボランティア体験を行った子どもたちを中心に、コンパネ6枚分の大きさのキャップアートを作製する。
3年目	町内5校と町内福祉施設等の参加で、合計8か所からそれぞれコンパネ2枚分ほどの大きさのアートを出展する。
4年目	いきいきサロンの代表や世話人さんに、リサイクル活動について説明するとともに、地域でリサイクル活動がもっと広がり、繋がるようキャップアートづくりを当日実際に行い、作品を作製いただく。その後、各サロンに持ち帰り、サロン参加者が協力して作り上げ、ボランティアフェスティバルで30サロンと4団体が作られたパーツをつなげ、約3m×8mのアートとして一つの物に作り上げる。

5. ふりかえり（成果や課題等）

（成果）

- キャップの回収から子どもたちが実際にリサイクルについて考えることができ、体験し、行動（回収・分別・発送）することで、目に見えた活動につながり、達成感を感じ、それが自信に変わった。
- 回収だけでなく、楽しみながらできる活動を取り入れ、キャップアートに挑戦することによりみんなの興味を引き、一緒に活動をする子どもが増えた。
- 月日が経つにつれて、分別等を他の子どもたちに教えてくれる姿も見られ、自主的な行動に変わっていった。
- いきいきサロンの皆さんがキャップアートに挑戦していただいたことで、今までにない広い範囲の地域や年齢層の方に活動が広まった。今まで知らなかったけど…とキャップを持ってきてくださる方も多くなった。

（課題）

- ただ集めればよいと思われる方もおられるため、正確な情報を提供し、回収できない物の広報等を行う必要がある。
- この事業により一層協力、理解していただけるように、学校との連携を密にしていく。

6. 参加者の声

- 学校帰りに分別している子どもたちを見て他の子どもが「何しとるだぁ」と、一緒に参加してくれる。
- 「このキャップは、何になるだぁ？」と、興味を持ってくれる。

- キャップアートを重ねるごとに、自分たちで原画を考え、足りない色のキャップについても回収の呼びかけを行い、自分たちで努力をする等、自主的な行動につながった。
- サロンの皆さんが、自分たちが作ったアートがどのように完成したか、フェスティバル会場まで来場された。また、回収する輪が広がった。

7. 担当者としての感想

年を追うごとに、子どもたちが必然的にリサイクル活動やキャップアートに興味を持ち、地域に浸透していることを実感する。また、今年は、いきいきサロンの皆さんの参加でより地域に広がり、参加者や活動を拡大することができた。今後も人がやさしく、人にやさしい町になるよう、目に見えるリサイクル活動、ボランティア活動につなげていきたい。



ここが いいわ!

●福祉教育プラットフォームの可能性

この実践は、乳幼児期（保育所）から高齢者にわたり、地域のあらゆる人が一つの取り組みに関わるということに価値があります。そこには社協が得意とする「つなげる、ひろげる」仕掛けがあります。

また、学校関係者に偏りがちな「福祉教育連絡会」を、福祉施設等の担当者も交え開催している点が評価できます。情報共有や伝達する場を地域で設けることで、福祉学習プログラムの協働・連携の実践へとつながります。今後は、関連した情報提供や学習の機会を設定することを、意図的に仕組んでいくことが期待されます。

【参考】

ペットボトルキャップの回収については、キャップをリサイクル業者に購入いただき、売上代金を途上国の子供たちのワクチン代として使うだけでなく、環境や貧困をはじめとした世界の課題・地域再生等についての学習や、被災地支援への寄付等、社会の変化に応じて、その範囲も広がっていています。

現在、約 430 個で 10 円のワクチン代ができます。ポリオワクチンは 1 人分 20 円。

20 円で 1 人の子どもの命を救うことができます。



資料編

【資料編】市町村社会福祉協議会の連絡先一覧と活用可能な学習メニュー

各市町村の社会福祉協議会では、福祉教育に関する相談を受け付けるとともに、体験講座や、機材の貸出等を行っ

社協名		郵便番号	住 所	TEL
鳥取市	本 庁	680-0845	鳥取市富安 2 丁目 104-2 さざんか会館 1 階	(0857)24-3180
	ボランティア・市民活動センター	680-0845	鳥取市富安 2 丁目 104-2 さざんか会館 2 階	(0857)29-2228
	鳥 取 総合福祉センター	680-0845	鳥取市富安 2 丁目 104-2 さざんか会館 1 階	(0857)24-3180
	国 府 町 総合福祉センター	680-0142	鳥取市国府町麻生 4-2 老人福祉センター内	(0857)22-1880
	福 部 町 総合福祉センター	689-0106	鳥取市福部町海士 1013-1 砂丘温泉ふれあい会館内	(0857)75-2337
	河 原 町 総合福祉センター	680-1221	鳥取市河原町渡一木 277-1 老人福祉センター内	(0858)76-3125
	用 瀬 町 総合福祉センター	689-1211	鳥取市用瀬町別府 96-2 保健センター内	(0858)87-2302
	佐 治 町 総合福祉センター	689-1313	鳥取市佐治町加瀬木 2171-2 老人福祉センター内	(0858)89-1022
	気 高 町 総合福祉センター	689-0331	鳥取市気高町浜村 8-8 老人福祉センター内	(0857)82-2727
	鹿 野 町 総合福祉センター	689-0425	鳥取市鹿野町今市 651-1 老人福祉センター内	(0857)84-3113
青 谷 町 総合福祉センター	689-0521	鳥取市青谷町露谷 53-5 老人福祉センター内	(0857)85-0220	
米子市	本 所	683-0811	米子市錦町 1 丁目 139-3 福祉保健総合センター内	(0859)23-5490
	淀江支所	689-3402	米子市淀江町淀江 1110-1 老人福祉センター内	(0859)56-5467
倉吉市	本 所	682-0822	倉吉市福吉町 1400	(0858)22-5248
	関金支所	682-0411	倉吉市関金町関金宿 1115-2 高齢者生活福祉センター内	(0858)45-3800
境港市		684-0043	境港市竹内町 40	(0859)45-6116
岩美町		681-0003	岩美町浦富 645	(0857)72-2500
八頭町	本 所	680-0463	八頭町宮谷 254-1 老人福祉センター内	(0858)72-6210
	船岡支所	680-0411	八頭町船岡殿 159 船岡保健センター内	(0858)73-0672
	八東支所	680-0532	八頭町東 593-1 地域福祉センター内	(0858)84-2210
若桜町		680-0701	若桜町若桜 1247-1 地域福祉センター内	(0858)82-0254
智頭町		689-1402	智頭町智頭 1875 智頭町保健・医療・福祉総合センター内	(0858)75-2326
湯梨浜町	本 部	689-0601	湯梨浜町泊 1085-1 保健福祉センター内	(0858)34-6002
	羽合支部	682-0722	湯梨浜町はわい長瀬 584 健康福祉センター内	(0858)35-2351
	泊 支 部	689-0601	湯梨浜町泊 1085-1 保健福祉センター内	(0858)34-6002
	東郷支部	689-0713	湯梨浜町旭 83 老人福祉センター内	(0858)32-0828
三朝町		682-0125	三朝町横手 50-4 町立福祉センター内	(0858)43-3388
北栄町	本 所	689-2205	北栄町瀬戸 36-2 社会福祉センター内	(0858)37-4522
	北条支所	689-2111	北栄町土下 118-5	(0858)36-4738
琴浦町	本 所	689-2352	琴浦町浦安 123-1 社会福祉センター内	(0858)52-3600
	赤碓支所	689-2501	琴浦町赤碓 1113-1	(0858)55-1124
南部町	本 所	683-0351	南部町法勝寺 331-1 総合福祉センター内	(0859)66-2900
	会見支所	683-0227	南部町浅井 938 総合福祉センター内	(0859)64-3515
伯耆町	本 所	689-4121	伯耆町大殿 1010 保健福祉センター内	(0859)68-4635
	岸本支所	689-4121	伯耆町大殿 1010 保健福祉センター内	(0859)68-4635
	溝口支所	689-4201	伯耆町溝口 281-2 福祉センター内	(0859)63-0666
日吉津村		689-3553	日吉津村日吉津 973-9 社会福祉センター内	(0859)27-5351
大山町	本 所	689-3111	大山町赤坂 764 福祉センターなかやま内	(0858)49-3000
	大山支所	689-3332	大山町末長 503 総合福祉センターだいせん内	(0859)39-5018
	名和支所	689-3211	大山町御来屋 467 保健福祉センターなわ内	(0859)54-2200
日南町		689-5211	日南町生山 397-1	(0859)82-6038
日野町		689-5131	日野町黒坂 1247-1 老人福祉センター内	(0859)74-0338
江府町		689-4403	江府町久連 7-1 老人福祉センター内	(0859)75-2942

ています。お気軽にご相談ください。

F A X	疑高 似 齢 体 験者	車 い ず 体 験	白 杖 体 験	体 ア イ マ ス ク	点 字 体 験	体 ボ ラ ン テ ィ ア	レ ク リ エ ー シ ョ ン 指 導	図 ビ デ オ 等 貸 出	その他
(0857)24-3215									○鳥取市社協総合福祉センター統一事業「福祉の仕事体験事業」
(0857)29-2338	○	○				○		○	○書き損じはがき、使用済切手の回収 ○入門講座、出前講座等
(0857)24-3215	○	○		○	○	○	○		
(0857)22-1889	○	○				○			
(0857)74-6810	○	○				○			
(0858)85-0103	○	○				○	○	○	
(0858)87-2369	○	○				○			
(0858)89-1045	○	○				○	○		
(0857)82-3171	○	○				○	○	○	
(0857)84-2453	○	○				○			
(0857)85-0079	○	○				○	○		
(0859)23-5495						○			
(0859)56-6400									
(0858)22-5249	○	○				○		○	○出前講座 ○講師派遣調整 ○福祉用具貸出 ○ペットボトルキャップの回収
(0858)45-2533									
(0859)45-6146	○	○					○	○	
(0857)72-3811		○	○	○	○	○			○用具貸出（白杖・アイマスク・点字）
(0858)72-2793	○	○				○	○	○	○レクリエーション指導
(0858)72-6122	○	○				○	○		○交流会事業（独居高齢者・福祉施設等）
(0858)84-2227		○				○	○		○ペットボトルキャップ・アルミ缶ブルタブ・使用済切手・ 使用済割り箸・使用済プリペイドカード回収
(0858)82-1204		○				○	○	○	○出前講座 ○福祉施設等との交流調整
(0858)75-4110	○	○		○			○		○児童福祉体験 ○出前講座
(0858)34-6013									○出前講座
(0858)35-4143	○	○		○	○	○	○	○	
(0858)34-6013									
(0858)32-0834									
(0858)43-3378	○	○		○	○	○			
(0858)37-4532	○	○				○	○		○出前講座
(0858)36-4823									
(0858)53-2035	○	○		○		○	○		○福祉学習サポーターによる講話
(0858)55-1137									
(0859)66-2901	○	○		○		○	○	○	○出前講座 ○福祉施設等との交流調整
(0859)64-3513									○ペットボトルキャップの回収・分別・発送とキャップアート作成
(0859)68-4634	○	○							○認知症サポーター養成講座 ○手話について学ぶ
(0859)68-4588									○車いすバスケットボール ○卓球バレー
(0859)63-0660									○盲導犬について学ぶ ○デイサービス訪問
									○グラウンドゴルフ（世代間交流）
(0859)27-5931		○				○			○書道体験 ○ボランティアスクール（ボランティア、障がいに関する学習車いす体験、障がい者スポーツ体験）
(0858)49-3013	○	○				○	○		○サマースクール（主に環境学習、体験）
(0859)39-5021	○	○				○	○		○春休みチャレンジスクール（主に障がい等理解、体験）
(0859)54-6028	○	○				○	○		○ペットボトルキャップ・割り箸・廃油の回収
(0859)82-6058						○			○世代間交流（保育園／小学生／高齢者等）
(0859)74-0365									○講師派遣調整
(0859)75-3900									

福祉教育ホームページ一覧（紹介）

鳥取県社会福祉協議会では、
福祉教育の活動で活躍していただける資料等を
ホームページ上に用意しています。

ホームページ http://www.tottori-wel.or.jp/p/chiiki/we_top/we/

○福祉教育関連資料

福祉で輝く地域づくり（地域版・ハンドブック・ヒント集）
ともに生きる（小学生版・中学生版・先生のためのガイドブック）

○福祉教育の広場

- ・ リレーコラム
- ・ 福祉教育とは何か
- ・ 鳥取県の福祉教育のあゆみ

○市町村社会福祉協議会の福祉教育

- ・ 都道府県・指定都市社協他
- ・ 鳥取県内市町村社会福祉協議会の福祉教育の内容

○福祉教育関連情報

- ・ ボランティア情報

○資料

- ・ 平成 20 年度実施「福祉に対する意識・実態調査」の概要
- ・ 情報誌「ホットアイ」
- ・ ユニバーサルデザインってなに？
- ・ 国際シンボルマークってなに？
- ・ 福祉の職種・資格（福祉のお仕事スタート／全国社会福祉協議会）
- ・ 収集ボランティアあれこれ

○各種貸出

- ・ ビデオライブラリー
- ・ 鳥取県内ニュースポーツ用具貸出団体一覧

○リンク集

- ・ 鳥取県福祉研究学会
- ・ 全国社会福祉協議会（地域福祉・ボランティア情報ネットワーク）
- ・ 鳥取県共同募金会
- ・ 鳥取県国際交流財団
- ・ 鳥取県総務部人権局人権・同和対策課
- ・ 「広がれボランティアの輪」連絡会議

ともに生きる

福祉教育研究委員会(50音順)

安部 徳子	桑の実会 代表
石原 司子	南部町社会福祉協議会 総務福祉係員
大羽 省吾	鳥取県教育委員会事務局家庭・地域教育課社会教育担当 係長
國本 真吾	鳥取短期大学幼児教育保育学科 准教授(委員長)
小谷 次雄	倉吉市成徳公民館 館長(副委員長)
高橋 和也	鳥取県福祉保健部長寿社会課地域支え愛推進室 係長
谷岡 隆幸	湯梨浜町社会福祉協議会 主事
藤田 充	特定非営利活動法人 賀露おやじの会 理事長
牧 尚志	鳥取県立倉吉東高等学校 校長
真山 昭子	琴浦町社会福祉協議会 福祉学習サポーター

(所属・職名は、平成26年3月現在)

発行者

社会福祉法人 鳥取県社会福祉協議会
ボランティア・市民活動センター
〒689-0201
鳥取市伏野1729-5 県立福祉人材研修センター内
TEL 0857-59-6332 FAX 0857-59-6340
URL <http://www.tottori-wel.or.jp>
2014(平成26)年3月発行